



雪球が

世界に飛んだ日

—小さな町の大きな挑戦・北海道壮瞥町—



谷岡 康徳

(元昭和新山国際雪台戦事務局次長)

雪球が

世界に飛んだ日

—小さな町の大きな挑戦・北海道壮瞥町—



谷 岡 康 徳

(元昭和新山国際雪合戦事務局次長)

スポーツ・雪合戦三種の神器

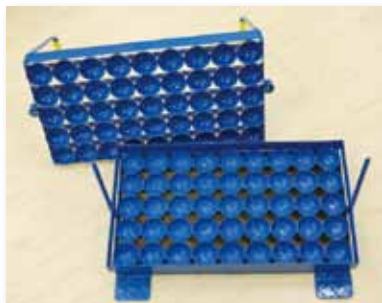


雪合戦専用ヘルメット



世界初の雪合戦ルールブック(左)

改正後のルールブック(右)



雪球製造器

雪球が

世界に飛んだ日



—小さな町の大きな挑戦・北海道壮瞥町—



谷 岡 康 徳

(元昭和新山国際雪合戦事務局次長)

はじめに … 1

第1章 スポーツ・雪合戦誕生

- ・熱闘昭和新山国際雪合戦 … 3
- ・麦圃生山・昭和新山生成 … 5
- ・酒はアイデアの長!? … 5
- ・雪の降らない南の人がくれたヒント … 7
- ・なぜ、いま雪合戦なのか … 8
- ・世界初の雪合戦ルール … 10

第2章 スポーツ・雪合戦の三種の神器

- ・深夜に及んだルール改正 … 12
- ・ヘルメットは手づくり … 15
- ・雪球製造器とたこ焼き器 … 16
- ・プレーヤーを集めろ! … 19
- ・スポーツ・雪合戦、勝利への3要素 … 20

第3章 汗と知恵を出した町民ボランティアスタッフ

- ・町民全員参加型の実行委員会 … 23
- ・実行委員会の構成 … 25
- ・総務委員会 … 25
- ・競技委員会 … 27
- ・事業委員会 … 28
- ・施設運営委員会 … 30



- ・ローカルからグローバルイベントへ … 31

第4章 広がる雪合戦の輪

- ・全国に雪合戦の輪を広げたい … 33
- ・東京のマスコミに売り込む … 34
- ・雪さえあればどこでもできる … 35
- ・昭和新山国際雪合戦に出たい! … 36
- ・雪合戦のウィンブルドンをめざして … 37
- ・日本雪合戦連盟の設立 … 38
- ・地域づくり国土庁長官賞を頂く … 39

第5章 雪球が世界に飛ぶ

- ・オーストラリアで初の海外雪合戦 … 41
- ・初めての海外普及活動から学んだこと … 48
- ・ヨーロッパで初の雪合戦 … 50
- ・国際雪合戦連合結成 … 52
- ・外国人初の1級審判員の誕生 … 54

第6章 地域おこしとしての雪合戦

- ・同じ発想をした町・新潟県小出町 … 55
- ・なぜ雪合戦は共感を得られたのか … 55
- ・イベントからビジネスへの模索 … 56
- ・雪合戦と人材育成 … 57
- ・オリンピックへの大きな夢 … 58



第7章 スポーツ・雪合戦あれこれ

- ・ 科学者と医師のアドバイス … 61
- ・ 監督のサイン、観客のヤジ … 63
- ・ スポーツ・雪合戦、作戦あれこれ … 64
- ・ スポーツ雪合戦実況放送 … 66
- ・ 雪合戦を支える人・ひと … 67

第8章 スポーツ・雪合戦、未来への提言

- ・ 新たな観光資源と情報発信の拠点づくり … 69
- ・ 海外普及へのパワーアップ … 70
- ・ サポーター人口の参画 … 71

あとがき … 73



北海道壮瞥町。北海道以外の人に「壮瞥」を正しく発音してもらうことは難しい。先住のアイヌ民族が、洞爺湖から唯一流出し、落下する滝を見て、滝(ソー)のある川(ベツ、ペツ)と呼んだことが語源とされている。地名の字句より、昭和新山のある町、大相撲の第55代横綱北の湖の出身地と言った方が理解が早い。北海道南西部にあるこの町の人口は、2,529人(平成30年10月末)。最も人口が多かった昭和33年と比較すると、3分の1以下に減少している。洞爺湖、有珠山、昭和新山を有するこの町の主産業は、農業と観光。全国どこにでもある過疎と高齢化が進む地域である。

この何の変哲もない町が世界に情報を発信し、世界をリードしている冬のニュースポーツがある。「スポーツ・雪合戦」である。この「スポーツ・雪合戦」は、壮瞥町民が汗と知恵を出して開発したもので、1989年2月25日、雪合戦がスポーツ大会として世界で初めて開催された。。壮瞥町民は町の宝と誇りに思っている。21世紀に伝えていきたい「北海道遺産」として北海道が認定(2001年10月22日)している。

なぜこの小さな町が、人類最古の冬の遊びであった雪合戦を、現代的な視点から見直し、世界初の雪合戦ルールを考案、競技用具製作し、冬のニュースポーツとして開発できたのか。その疑問に答えるには、昨年2月の大会で、30年を迎えた「スポーツ・雪合戦」の原点というべき、初期の実行委員会の活動を振り返ってみる必要がある。このことは単にこれまでの30年の歩みを思い起こすだけでなく、これからの30

年を展望する大切な作業である。草創期に事務局として関わった者として、その記録を残すことに使命と責務を感じていた。

ふるさと創生が叫ばれて久しい。その中身は何だろう。住民が誇りに思う地域の宝さがし、宝づくりもそのひとつではないか。

本書では、地域おこし、独創性のあるイベント開発、ニュースポーツとしての「スポーツ・雪合戦」の考案がどのように行われたのか、試行錯誤を繰り返すなかで、課題を解決するポイントとなったのは何であったのかを振り返り検証してみたいと思う。雪合戦愛好者はもちろん、全国で地域づくり、町おこしに奔走、尽力されている皆さんの参考になれば望外の喜びである。特に、ボランティアスタッフとして大会を支え、「スポーツ・雪合戦」を創り上げてきた壮瞥町民の皆さんには是非読んで欲しいと願っている。

なお、筆者も微力ながら、大会運営スタッフの一員として関わった。その行動は個人の判断ではなく、実行委員会の意志、決定によるものである。そのため、客観的な視点から記述する意図から、「私」ではなく、文中では「谷岡」と表記した。実行委員会のメンバーについては、敬称を省略したことをお許し頂きたい。また、本書で使用している写真は、雪合戦マガジン編集部と昭和新山国際雪合戦実行委員会より提供を受けた。資料を提供してくれた、NPO法人雪合戦インターナショナルの庵 匡氏と壮瞥町教育委員会の蛸名雄一氏、執筆を激励してくれた雪合戦マガジン編集者の山田雅志氏にもお礼申し上げたい。

❄ 熱闘昭和新山国際雪合戦

2018年2月25日。第30回昭和新山国際雪合戦の一般の部の決勝戦。各クラスの決勝戦進出チームのみがプレーできるセンターコート。両チームの選手が白煙を上げる昭和新山に向かい横列に並んだ。過去3回の優勝経験があり、連覇を狙う、道央地区ブロックの雄「でいくさんズ神出」。一方は、過去1回の優勝、3回の準優勝を誇る胆振の強豪「AS・SC」。

この両チームには、国際試合に臨むために今年結成された「オールジャパン(日本代表チーム)」の選手も含まれている。昨年も決勝戦で対戦した因縁の試合である。

緑のヘルメットと赤いポンチョの審判団と記録員が会場に紹介される。次に、赤と青のヘルメットを着用し、統一したユニフォームに身を固めた両軍の選手ひとり一人のポジションと名前が、コート内に呼び上げられる。その都度、観衆から大きな歓声と激励の選手の名前が連呼される。片手を上げ声援に応える選手。その顔は緊張しつつも、決勝戦しか使用できないセンターコートに立てる喜びと誇りに溢れている。やがて、センターラインを挟んで両軍は挨拶を交わし、握手してフェアプレーとお互いの健闘を誓い合う。自陣のシャッターの前で円陣を組み氣勢を上げ、気持ちを集中させる。バックラインに整列し主審の「試合開始」の合図を待つ。

「ピー」主審の力強い笛の音とともに、14個の雪球が、激しく空中を飛び交う。両軍自慢の俊足フォワードが、センターシェルターに疾走する。一瞬早くスライディングした「でいく

さんズ神出」のプレイヤー速やかに体勢を整え、相手選手に雪球を当てる。1ポイントのリード。この攻防は雪合戦の醍醐味であり、その後の戦況に大きな影響を与える。「ヒュー」。空気を切り裂くような、速く、鋭い雪球がシェルターすれすれに一直線に飛ぶ。前線への雪球の補給もスムーズだ。コート後方からも速球が相手プレイヤーを狙う。目線を一瞬でも外すと、数力所から雪球が飛んでくる。

一進一退の膠着状態のなか、センターシェルター争奪の攻防が始まる。放物線を描いた「ロブ」と呼ばれるコントロールされた緩い雪球が、雨あられのように上空から降ってくる。両膝をつき、上体をそらし、身体を前後左右に動かしてその攻撃をかわす前衛のプレイヤーのボディアクションの妙技に、会場から歓声と拍手がわき起こる。第1セットは3分間の試合時間が終了。序盤のリードを守り切り、7対6で「でいくさんズ神出」がセットを先取。

2セット目も有利に進める。「パチーン」。乾いた音とともに、ヘルメットに命中した雪の破片が飛び散る。「1番アウト〜」。審判員の気迫のこもったコールが響く。「ウオー」咆哮のようなどよめきが広がる。肩を落とし残念そうにコートから出るアウトプレイヤー。両チームとも相手チームのプレイヤーに、コントロールされた鋭い雪球を浴びせる。試合は終盤。劣勢の「AS・SC」は、起死回生のフラッグ奪取を目指して相手陣地に攻め込む。「でいくさんズ神出」の守りは堅く、次々と雪球を当てられる。時間切れとなり7対1で「でいくさんズ神出」が2セット連取して2年連続、4回目の優勝を飾った。昨年の雪辱を期した「AS・SC」の悲願はならなかった。

試合終了とともに、両チームの選手は握手を交わす。センターコートを十重二十重に囲んだ観衆から大きな拍手が両軍に贈られた。この白熱した決勝戦を、昭和新山から採火された聖火と、北国の風をはらみ、へんぽんと翻

る国際雪合戦連合加盟 12カ国の国旗が見守っていた。

❄️ 麦圃生山・昭和新山の生成

北海道壮瞥町(昭和38年より町制施行)。明鏡・洞爺湖の40%を占有するこの町は、長流川流域の肥沃な土地を活用した農業の町であり、大正から昭和40年代前半までは、鉄鉱石や硫黄を産出する鉱業の盛んな町であった。

1943年(昭和18年)12月28日この町の南西部で異変が起きた。地震が頻発し、17回の火山性の爆発が発生した。地震、噴火、土地の隆起により、被災地となったフカバ集落などの住民は、避難と転居を余儀なくされた。1年10ヶ月に及んだ火山活動は、地下のマグマが麦畑を推し上げ、ペロニーテ型といわれる粘性の強い溶岩塔をもつ、406メートルの新山を誕生させた。

この新山を我が子のように慈しみ、観測を続け、乱開発から守るため私財を投じた人がいた。当時壮瞥郵便局長の三松正夫さんである。三松さんによって、硫黄の採掘などの乱開発から守られた昭和新山は、学術上の貴重な財産、観光資源として保存され、後世に引き継がれた。

昭和新山の誕生と明鏡・洞爺湖のたたずまい、相次ぐ鉱山の閉山により、壮瞥町の産業構造は変貌し、昭和40年代には「農業と観光の町」となった。現在、昭和新山国際雪合戦のメイン会場として使用している空間は、昭和新山生成時の第1、第2火口跡である。

❄️ 酒はアイデアの長!?

1987年8月初旬、当時北海道の夏の風物詩ともなっていた「昭和新山火まつり」が開催されていた。主催者である壮瞥町観光協会会長・阿野康春(北栄観光社長)と、新山温泉観光協会会長・唐神幹夫(カラカミ観光常務)、

そして壮瞥町長・菅原俊一が懇談していた。夏の洞爺湖・昭和新山観光は好調であるが、冬場は閑古鳥が鳴くような低調な観光入り込み状況が話題となった。このことは地域経済、雇用面からも大きな問題である。この「デカンショ観光」からの脱却は洞爺湖観光の喫緊の課題である。夏の「火まつり」の対極をなす、冬の観光の中核となるイベントの開発ができないか。北海道観光誘致協議会のメンバーでもあった阿野と唐神は、財源の目星を付けると、1987年8月7日、壮瞥町内の中堅・若手の町民により構成する、「冬期観光振興のためのイベント検討会」を立ち上げた。商工会青年部員、農業者、会社員、役場職員、スポーツ関係者からなる検討会は3回開催された。出されたアイデアは、昭和新山をバックに、「大雪像を造ると映えるのでは」、「スロープを使った仮装そり大会」、「犬ぞりを走らせると絵になるのでは」、「スキーマラソン」、「連風を揚げてみては」、「雪と昭和新山の地形を活かした数種類のゲームや遊びの組み合わせはどうか」など・・・。

道産子は発想が豊かで、雪や氷、寒さのハンデいを逆手にとったイベントは道内各地ですでに実施されていた。提案されたアイデアも二番煎じ、三番煎じのものが多く、なかなか決定打が出なかった。疲労感が漂うなか、メンバーは気分を一新するため、居酒屋で酒を酌み交わした。その時末席にいた山中漠(のちの壮瞥町長)が「雪合戦はどうか」とボソッと提案した(阿野康春氏談)。メンバーが最初からこの提案に諸手を挙げて賛同したのではない。雪合戦は雪国の古来からの「遊び」であり、雪国であれば、どこでもできる。雪合戦遊びを昭和新山で実施して、誘客や地域おこしに繋がるのか。あまりに陳腐すぎて目新しさが無い。昭和新山という絶好の背景をバックに展開するイベントとしては、独創性とインパクトに欠けるとメンバーは考えた。

ただ、アイデアが枯渇して行き詰まっていた検討会は、古来からの遊びに、

現代的なアレンジを加えると案外いけるのではないか。イベントとして開発してみようとの方向に動いた。酒がメンバーを固定観念の捕縛から解放し、自由奔放な発想を促した。阿野と唐神も検討会のこの方向性を後押しした。遊びの雪合戦からイベントの雪合戦へ、新たな挑戦が始まった。

人工衛星打ち上げになぞらえると、「雪合戦」というアイデアを出すことが第1弾ロケットだ。ここまではどこの地域でもあるお話であろう。次は、それを具体化し、イベントとして実現可能な条件を整備し、ビジョンと戦略を示すことが第2弾ロケットになる。これまでも雪国のなかには、雪合戦を地域おこしの起爆剤としてアイデアを出した人は何人もいたのではないかと思います。ただ、その提案に対して、第2弾の戦略的発想に至らなかったり、財源の裏付けがなくて挫折した例があったのではないかと推測する。「雪合戦」のアイデアが出たその時、スポーツ関係者から、遊びとしての雪合戦ではなく、現代風なアレンジをして、ルールを創り、スポーツとして開発しようという第2弾の発想が出た。スポーツ・雪合戦を地域おこしイベントとして開発するという方向性がしっかりと固まった瞬間であった。1987年12月12日、冬のニュースポーツ・雪合戦創造の模索が始まった。酒は百薬の長。いや、アイデアの長!?でもある。

雪の降らない南の人がくれたヒント

アイデアを提案した山中には、ある原風景が脳裏にあった。旧正月（春節）の頃、雪の降らない東南アジアや東アジアから多くの観光客が昭和新山を訪れる。生まれて初めて雪を見た彼らがする行動。最初は雪を手に取り、そろりと頬につけ、その感触や冷たさを体感する。次に仲間同士で雪を掛け合いながらはしゃぐ。そして雪を丸めて投げ合う。雪に対する先入観や体験の

ないこの観光客の行動は、人間の直感や本能に基づくのではないか。雪合戦が、人類最古の冬の遊びといわれる由縁はここにある。雪国に住む私達は、日常的な除雪・排雪の煩わしさのなかで、雪を厄介物と見て、資源としての価値を見失っていたのではないか。そのことを雪のない地域から来た観光客が教えてくれた。

洞爺湖から昭和新山へ向かう道道沿いでレストランを経営する山中は、来遊客と懇談するなかからも、雪を地域の資源として活用する方法、雪を投げ合うことの楽しさを感じ取り、アイデアを暖めていた。当時広報部会長で、第3回大会から昭和新山国際雪合戦実行委員会の統括に就任する山中は、いま、なぜ雪合戦か、その基本コンセプトをまとめた。長文になるが紹介したい。

なぜ、いま雪合戦なのか

「冬・昭和新山は白く熱き闘いに燃える・・・」のキャッチフレーズで始まる、第1回昭和新山国際雪フェスティバル実施計画書のなかで、それは示されている。「(前略)近年、北海道の本当の魅力は冬にある。冬こそ北海道だ。という言葉がチラホラと叫ばれ、長い間考えられていた夏＝ON、冬＝OFFという固定観念の呪縛から私達も少なからず解放されてきましたが、いまだにこの約半年に及ぶハンデいを克服し、挑戦しているのはごく少数の人々でしかありません。北海道の冬はまだ耐える、非活動的で暗いもの、という意識からそう抜け出てはいないのです。

しかし、北海道に生きる人間が冬眠していたのでは観光誘致どころではありません。人々は魅力ある人間と空間(時間)を求めて集まってくるものです。いまこそ北海道人自身が、自発的に北海道の内発的魅力を発見し、創り

上げ、ハンデいを、そこにしかない価値に、OFFをONに逆転する努力をすべき時です。具体的に言えば、私達自身が、いかにしたたかに北海道の冬とつきあい、より快適で、より楽しい暮らし方をできるのかを追求することであり、そしてその姿勢に対する共感をどれだけ獲得していけるかということにあります。住空間、衣料、レジャースポーツ、食物、交通体系、芸術・文化等、北海道人としてのライフスタイルの総合的な提起、文化の発進地としての位置づけと、それによる国内はもとより国際的な共感を呼び起こすことです。意識の転換と実行はそう容易なことではなく、長期的な展望の下で長い忍苦と努力が必要ですが、今後の北海道経済、そして観光にとって欠くことのできない先決な課題であることは明らかであります。

こうした認識に立ったひとつの具体的な提案と実践が、昭和新山国際雪フェスティバルです。(中略)現代人のストレスや不安、それらを北海道の白い大地にぶつけ、本当の人間性と本能に目覚める。特に厳しい自然のなかでこそ生まれ、参加した者でしかわからない連帯感と自らのアイデンティティが、ドラマチックな地域文化を創造します。既存冬季競技イベントの良さを取り入れ、胆振西部観光圏の地域的背景と、より参加しやすい単純性、国際的にも通じる現代的アプローチを加味したもの、それが昭和新山国際雪フェスティバル・第1回昭和新山国際雪合戦です。

雪合戦。スキー、スケートがポピュラーなものでなかった時代のエキサイティングなゲーム。懐かしくもあり、あたりまえでもあったこの遊びは、国際雪フェスティバルにおいて、格闘技、チームスポーツ、そして作戦が重要である頭脳のゲームの要素を持つ、新しいスポーツに生まれ変わります。雪を利用し、また、雪がなければ成立し得ないスポーツ、古くからの遊びをルールによって現代化したスポーツ、しかも昭和新山という壮瞥町のランドマークを

背景として争われるスポーツ、このイベントはその独創性と地域性において他の追随を許さず、余計なものであった雪を、最大限に快適で楽しい豊かな冬の生活に取り組むひとつの手法として、道内外の人々に十分なインパクトをもって話題を提供するであろうと考えられます。(中略)

最後に、こうして新しいスポーツイベントを企画し発展させるために、しっかりとルールづくりと権威ある運営を行い、将来的な参加チームの拡大による全国大会、国際大会の開催を目標とする、まさに長期的展望をもった事業にしていきたいと思います。近い将来、ウィンタースポーツとしての雪合戦が確立し、その発祥の地として、雪合戦のメッカとなることは、新しい観光の手法を開発したことであり、このことから派生する衣料、用具等を含めた総合的な冬期アウトドアスタイルの開発は、北方圏文化創造への大きな提案ともなり、全北海道的見地からいっても極めて意義深いものになるでしょう。」。

❖ 世界初の雪合戦ルール

「スポーツ・雪合戦」のルールづくりが始まった。国際雪合戦ルール制定委員会が結成され、委員長に丸谷一(北海道教育庁スポーツ保健体育課指導主事)、委員に小野征爾(日本雪合戦協会世話人)、富田静男(壮瞥町体育協会副会長)、千田重光(壮瞥町体育指導委員会委員長)、佐藤一彦(北海道胆振支庁商工労働課イベント主査)、藤木勝宏(壮瞥町教育委員会社会教育主事)の6名が委嘱された。会議には、事務局長の船田寅雄と次長の松浦久が同席した。

全体イメージとしては、雪球を投げ合いながら、当時大人気のインベーダーゲームや、TBSの人気番組「風雲たけし城」のように、障害物を征服して敵陣に攻め込み、相手を倒し、敵陣を制圧するゲームとした。ルール策定に

あたっては、既存の他スポーツのルールを参考とした。

まず、試合場(コート)の広さは、テニスコート縦に2面合わせた縦48メートル、横11メートルとした(テニスのコートはフィートで表示され、メートル法では、タテ23.77メートル、ヨコ10.97メートル)。

プレーヤーの数は、町内の中・高校生の協力を得て、シミュレーションゲームを3回行った。ラグビーの15人。多すぎて収拾がつかない。サッカーの11人。これでも多い。野球の9人に落ち着いた。使用する雪球の数は、1人のプレーヤー10個と計算し、1チーム1セット90個とした。

雪球に当たると「アウト」。コートの外に出なければならない。ドッジボールに似ている。

プレーヤー役割として、前線で攻める位置にいる者を「FW(フォワード)」、後方で雪球を補給・配球する者を「BK(バックス)」と呼称することとした。アイスホッケー(アイスホッケーでは「DF」という。)やサッカーと同じである。

コート内には自陣と敵陣に各3個の大小のシェルターという雪の壁を置き、コートの最後部にはシャトー(城)と呼ぶ最も大きな雪壁をつくる。このシャトーの前に、チームフラッグを立て、雪球はシャトーに置くこととした。

試合時間は剣道の標準試合時間の5分とし、3セットマッチで2セット先取したチームが勝利となる。

勝敗は、(1)時間内に相手のプレーヤー全員をアウトにする。(2)相手チームのフラッグを奪取する。(3)時間内に(1)(2)の結果にならないときは、生存プレーヤーの多いチームの勝利とする。

このようにして、1988年(昭和63年)12月6日世界初の雪合戦のルールの骨格ができあがった。構想から1年4ヶ月が経過していた。

❄ 深夜に及んだルール改正

競技スポーツは、ルールの制定、用具の開発、競技者・審判員の養成により成立する。スポーツ雪合戦では、「国際雪合戦競技規則」「ヘルメット」「雪球製造器」「プレーヤー」「レフェリー」がそれにあたる。

まず、ルールについてであるが、1988年12月にその原ルールができていたが、当初制定したルールを見直すタイミングを迎えた。どのスポーツも、競技を重ねることによってルールは進化し、スポーツとして成熟する。雪合戦も例外ではない。

1992年11月12日、大幅なルール改正の会議が、北海道壮瞥町の旅館「いこい荘」で開催された。日本雪合戦連盟が結成されていたこともあり、各道県連盟の代表もルール委員として参加した。会議に出席したのは、高屋敷日出夫(北海道連盟)、楠美幸一(青森県連盟)、小笠原清司(岩手県連盟)の各氏、長野県連盟は欠席した。実行委員会からは、当初のルール委員である千田重光、藤木勝宏に、審判部会長の阿野光弘の各ルール委員、阿野康春日本雪合戦連盟会長、山中漠統括、松本統括補佐、藤盛勉事務局長、谷岡康徳事務局次長が同席した。

会議は午後4時に始まった。事務局の目算としては、約2時間で終了し、午後6時から懇親交流会の予定であった。

まずコートの広さが議論になった。現行の48メートル×11メートルから、40メートル×10メートルに変更された。これは

コートサイドラインが長くなると、雪球の補給が難しくなり、雪球が飛ばない時間が多く、間延びした試合が多く見られたこと。また、雪球を投げないで、守りに徹したチームが勝利する珍現象が生じたことの反省である。スポーツでは、攻め合いにそのおもしろさの醍醐味があるのであって、雪球が飛ばないで、にらみ合っているだけでは観衆の共感は得られない。

プレーヤーの人数は、9人から7人に少なくした。野球、サッカー、バスケットボールなど球技はひとつのボールをめぐる選手がプレーし、審判員が判定する。ところが雪合戦は、プレーヤーの数だけ雪球が飛び交う。それだけに審判員の負担は大きく、審判技術の向上が欠かせない。物理的に大変難しいが、少しでも正確な判定ができるように、そして観ている人にも分かりやすくするための変更である。プレーヤーやファンに納得されるルールでなければ普及は難しい。

同時に相手コートに入る攻撃（一斉攻撃）を制限した。これは、主審の開始の合図とともに、相手のコートに全員が攻め込み、一気にフラッグを奪う戦法である。華々しく雪球が飛び交い、相手陣地に攻め込むシーンは、一見勇壮である。ただ、スポーツとしてみた場合、両軍14名の選手が入り乱れることによって、判定が後手になり、収拾ができなくなる事態が想定される。実体としてもそのようなことが起こった。そのことはプレーヤーに不満を生じさせ、観客からは雪合戦競技の判定の曖昧さを指摘されかねない。サッカーのオフサイドのような規制が必要とされ、相手コートに同時には入れるプレーヤーは3人までとなった。

雪合戦競技をよりアグレッシブなスポーツにするため、バックラインを設け、FW（フォワード）のプレーヤーはこのラインの前でプレーするようにした。雪合戦の醍醐味は、コート内で間断なく雪球が飛び交うことである。雪球

を保留したままの「にらみ合い」や、自陣で待機する「穴熊作戦」はできなくなった。

シェルターの数を少なくし、コート中央に「センターシェルター」を新設（「センターシェルター」は後年追加された）することとした。これはプレイヤーの隠れる場所を少なくすることによって、お互いに相手のプレイヤーを攻める機会を多くし、雪球がより飛び交うことを促すものである。センターシェルターの争奪は、両チーム同等のチャンスがあり、その後のゲーム展開を左右するエキサイティングプレーが期待される。主審の開始のホイッスルからの5秒間は、「魔の5秒」といわれ、鋭い、速い雪球が交錯するなか、一瞬の時間と空間を巧みなステップで疾走する俊足プレイヤーは大会の華でもある。センターシェルターを確保し、自チームの得意なフォーメーションで有利に試合展開するチームも多い。この5秒間は、プレイヤー、審判員、そして観客が最も緊張し、熱狂する場面のひとつである。

試合時間を5分から3分に短縮した。当初は剣道の標準試合時間を参考としたが、90個の雪球で5分は長すぎ、雪球がまったく飛ばない間延びする時間帯が多かったことによる反省である。

チームフラッグの位置を、センターライン側に2メートル寄せた。これも逆転を狙ってチームフラッグ奪取の戦法を助長し、待球作戦や消極的戦術を少なくする目的である。

午後4時に始まった会議は延々と続いた。甲論乙駁。熱い議論、協議は終わらない。休憩しても、夕食のことは誰も言わない。午前2時、ようやく改正ルールがまとまった。用意された会食膳に箸を付けた人は誰もいなかった。疲れ切った様子で、全員でビールで乾杯した。激論10時間、1993年版の改正国際雪合戦ルールができあがった。

2008年3月28日、スポーツ・雪合戦は、スポーツ競技として認知され、北海道体育協会への加盟が承認された。

❄ ヘルメットは手づくり

あるスポーツが普及発展するためには、安全性が担保されているかが大きなポイントとなる。スポーツ・雪合戦では、頭部および顔面の安全性確保のため、雪合戦用のヘルメットを開発することとなった。その際2つの条件が付された。ひとつは、プレーヤーの安全性を確保するものであること。もうひとつは、外見が格好よく、若い女性でも着用したいと思わせるものであることである。イメージとしては、アメリカンフットボールのヘルメットを想定した。

このことに奔走したのが、壮瞥町教育委員会藤木勝宏社会体育主事と、伊達市の片山スポーツ塚谷正和氏である。両氏は、綱引き連盟とアシックス社の了解を得て、綱引き競技のアンカーマンが使用するヘルメットに、オートバイのライダーが着用するヘルメットのシールドをジョイントするアイデアで、独自の原型モデルを創り上げた。このヘルメットは第4回大会まで使用された。ただ、ヘルメットに当たる雪球の衝撃力は予想以上に強く、シールドが破損したり、ヘルメット本体とシールドを接着しているビスが緩んだり、外れる弱点も露呈してきた。改良が課題となった。

事務局次長の谷岡は、1991年9月、アシックス本社のある神戸に飛んだ。製品開発の担当者に、スポーツ用品としての雪合戦ヘルメットの開発を懇請した。アシックス社は要請を受け入れてくれた。温暖の地の神戸では商品イメージができないことと、ニュースポーツ・雪合戦への理解が十分でないことから、厳冬期の昭和新山に来場し、試験を行いデータをとることとした。

何種類かのシールドを持参し、硬さの違う雪球や、氷状になった雪球をへ

ルメットやシールドに直接当ててその強度の試験を行った。また、プレーヤーから苦情の多かった、息で曇るシールドの長さについてのデータも収集した。1992年4月、雪合戦ヘルメットは、スポーツ用具として商品化され、スポーツ店で取り扱うようになり、日本国内はもとより、海外でも使用されている。アシックス社が撤退後は、札幌スポーツ館が雪合戦用ヘルメットの供給を担っている。

❄️ 雪球製造器とたこ焼き器

ルール策定作業とともに用具の開発も進められたが、最大の課題は、大量に使用する雪球をどのように作るかだった。ルール制定委員で、競技委員長に指名された千田重光が阿野康春に尋ねた。

「ところで雪球はどのように作るのですか？」

「コートにある雪を丸めて投げればいいじゃないか！」

「70チームで大会を開催した場合、雪球は何個必要か計算しましたか。69試合×1試合1チーム90個×2チーム×3セット＝37,260個ですよ。敗者復活戦をいれると球数はもっと増えます。」

「う～ん」阿野は思わず絶句した。

阿野は「自動(電動)雪球製造器」の製作について町内の鉄工業者に打診した。チャレンジしてくれたが、難しいとの答えが返ってきた。北海道工業試験場にも検討を依頼したが、要望は叶えられなかった。阿野は追い詰められた。思わず、ある会合で同席した、同級生で壮瞥町果樹組合長を務めていた坂爪義春に、「誰か雪球製造器を作ってくれる人がいないかなあ」と、ため息を洩らした。「いる!」。坂爪は即答した。「余市に川南鉄工という農機具屋があって、そこの親父はアイデアマンだから何とか考えてくれるのではない

か!」。

1988年5月、昭和新山国際雪フェスティバル実行委員会(のちに「昭和新山雪合戦実行委員会」と改称)は、最後の望みを、余市町で農機具製作をする川南鉄工所社長・川南力に託すこととした。

壮瞥町はりんご・ぶどう・プラム・いちご・さくらんぼなどのくだものの生産が盛んで、果樹農家は川南鉄工と農機具の取引があった。川南は北海道屈指の果物の産地・余市で農機具を製作するとともに、農業者の要望を受けて、農作業の軽減や、作業効率を高める農機具の開発・改良に日夜知恵を絞る、「アイデアマンの農機具屋」だった。果樹農家が腰をかがめ、木を傷つけないように苦労しながら草刈りしている姿を見て開発した草刈り機には、先端に川南流の独特のゴムを付け、樹木に負荷をかけない工夫がなされているとともに、作業者が腰に負担をかけないで作業ができるように配慮されていた。ある日、その草刈り機を5台、自社のトラックで農家に販売に出向いた川南は、5台を完売するとともに、新たに10台の発注を受けて帰ってきたというエピソードを持つ。この草刈り機は、果樹農家の辛い作業を軽減させる農機具として、農家の主婦層に好評であったという。

雪球製造器の製作要請を受けて川南が最初にイメージしたのは、大阪名物「たこ焼き器」であったという。薄い鉄板で作った球(きゅう)を半分に切り、上下に取り付ける。製造器に何個の半球を付けるか。1セットで使う雪球が90個であること、ルール上決められている雪玉の大きさ(直径 6.5 ～ 7.0 cm)と製造器の重量などを考慮して45個とした。雪球は器のなかでできていても、取り出そうとすると製造器に残った雪がくっついてスムーズに取り出せない。無理に取り出そうとすると雪球は割れる。そこで球と球の間に三角の空間を作る工夫をし、雪が製造器の下に抜けることによって、雪球をス

ムーズに取り出せるように工夫した。前代未聞の雪球製造器製作という難題に、川南の知恵と技術力は秀逸で、悲願の雪球製造器誕生に一条の光が差したかに思われた。しかし、川南は悩んでいた。雪球を「自動(電動)」で作るという課題がクリアできていない。春先から夏にかけて、農機具製作や修理の合間で、このことを考え続けていた。父親の悩む姿を見て、長男で専務の幸次(現社長)は、「もう、そろそろお断りの電話をしたほうがいいのではないか。」とアドバイスしたという。同じ雪国でも、水分の含有率で雪質は大きく違う。同じ地域でもその日によって雪質は異なる。雪球製造過程での外気温の影響も考慮しなければならない。扱いを間違えるとすぐ割れる雪球を自動(電動)で作ることは、極めて複雑な方程式の解を求めるに等しい。現在まで各地でこのことにチャレンジしてきた例はあるが、いまだ完成したとは寡聞にして聞いていない。川南は熟慮の末、自ら考案し製作した「手動の川南式雪球製造器」こそ、全国各地のどの雪質にも耐える普遍的な雪球製造器であると確信した。

1988年12月中旬、その1号器は、雪合戦の事務局に届けられた。壮瞥町役場(旧役場)の前庭で、世界初の雪球製造器による雪球の試作が行われた。白く輝く45個の雪球を見た阿野の眼は潤んでいた。阿野と川南は両手を握り合った。記念すべき「第1回昭和新山国際雪合戦」まであと2ヶ月あまりに迫っていた。この「川南式雪球製造器」は、日本国内各地の雪合戦大会で使用されているばかりでなく、ヨーロッパ、北米、オーストラリア、中国など世界各地で採用され、スポーツ・雪合戦普及の必須ツールとして国内外で活用されている。

余談となるが、後年、筆者は大阪・なんばを訪れる機会があった。たこ焼きを食べた。だが筆者の関心はたこ焼きではなく、それを作る「たこ焼き器」に

あった。よく観ると、タテ9個、ヨコ10個の小さなくぼみがあり、何と1回に最大90個作れるように設定されている。雪合戦で1セットに使う雪球も90個である。もちろん雪球とたこ焼きでは大きさが違う。川南氏は雪球をその半分の45個とした。谷岡がラジオのインタビューを受けたとき、雪球製造器を説明するのに、突然のひらめきで「たこ焼き器の親分」と表現してインタビュアーの笑いを誘ったが、現実にはヒントがここにあった。奇妙な符合に愕然とした。しばしたこ焼き器の前から立ち去ることができなかった。たこ焼きを食べ終わっても立ち去らず、たこ焼き器をジッと見つめている不思議な客の姿は奇異に見えたに違いない。誰もその男が、大阪のたこ焼き器と雪合戦の関わりに深く感動し、魅入っている心の内は理解できなかったに違いない。

❄ プレーヤーを集めろ!

3つめの要件はプレーヤーと審判員である。町内の野球・ソフトボール関係者を中心としたスポーツ競技者を対象に、雪合戦のルール解説と実技による講習会が頻繁に行われた。一番困惑したのは、一度に多数の雪球が飛び交うことと、選手の動きの速さについて行けず判定が遅れることであった。このことで次のプレーや判定に影響し、ゲーム自体が混乱してしまうことである。回数を重ねるうちに、審判のポジショニングや素早い判定ができるようになってきた。審判員の養成は徐々に軌道に乗ってきた。

スポーツ・雪合戦は世界初の試みで、ビジュアルな映像もなければ体験した人もいない。チームが集まるか心配だった。実行委員会は、70チームの募集を始めたが、初代事務局長の船田寅雄と事務局次長の松浦久は、問い合わせの多いルールの説明に終始した。未知のニュースポーツに70チームを参加させることは至難なことであった。一方ではイベントの目玉チームとし

て、社会人野球の新日鉄室蘭、大昭和製紙白老、王子製紙苫小牧に出場要請を行った。現役選手の参加は難しいと固辞されたが、かつて新日鉄室蘭野球部の監督を務めた、高屋敷日出夫さん率いる「新日鉄室蘭野球部OB」が参加してくれることになった。第1回大会は近隣の市町村から参加したチームが多数を占めた。

イベント名は「昭和新山国際雪フェステバル」とし、メインイベントが「昭和新山国際雪合戦」となった。国際と冠をつけたからには、外国チームが参加しないと、看板に偽りありとなる。実行委員会は、北海道大学と交渉し、留学生チームを招待することとした。イベント名の「国際」と名付けたのは、このイベントは地域おこし、特に冬の観光振興策の一環として、全国そして海外からの来訪を期待していることから、拡がりを持った命名をしたのである。看板に偽りがあってはいけない。70の参加チームを確保するため、船田と松浦は必死だった。

スポーツ・雪合戦、勝利への3要素

スポーツ・雪合戦で勝利するには何が必要なのか。漫然と雪球を投げるだけでは、チームの勝利には結びつかない。すべてのスポーツがそうであるように勝利に導くためには、確かなゲームプランが必要である。その中の重要な要素は、ヘッドワーク、フットワーク、チームワークの3つと考えている。

ヘッドワークは、戦術的なもので、3分間の試合時間をどのように使うか、相手のどの選手を攻めるのか。自チームの得意な攻撃パターンをいつ使うか。センターシェルターを確保するのか、相手に取らせるのか。チームがリードしている時のフォーメーション、リードされているときの反撃のきっかけをどこに求めるか。相手チームの陣容、いまの戦況や時間の経過をプレイヤー

にいかに正確に伝えるか。勝利への知恵は尽きない。

次にフットワーク。これは投力、走力など身体能力を総合して表現している。スローイングの速さ、正確さ。雪球が交錯するなか、その雪球を避けながらセンターシェルターに飛び込む技術。それは俊足であることはもちろん、瞬時の反射能力も求められる。また、スライデングした後、速やかに体勢を整え、ほぼ同時に飛び込んでくる相手チームのFWを狙う動作の俊敏さも必要である。センターシェルターをめぐる攻防に、テニスのロブボールのように、放物線を描いた雪球を集中的にシェルターギリギリに落下させる、「雨あられ作戦」がある。その対応として、従前は「やもり」のように、シェルターにピタリと張り付いてこれを避けていた。

しかし、雪合戦の投力技術は、ロブボールの角度を調節して、その「やもり」プレーヤーを圧倒し始めた。「雨あられ作戦」の対抗手段として現在の主流は、上空に目線を置き、正座しながら身体を前後左右に動かして雪球を避ける、「ボディアクション」が主流になっている。この技術もフットワークの範疇に入る。カナダチームは、来日後、日本での練習試合を数多く消化し、本戦に臨んでいるが、このロブボールには悩まされていた。強い球を投げる力は日本のトップチームと大差ないが、ロブボールの正確さに違いを感じていた。練習でも重点的に実施したが、日本のトップチームの正確なスローイングとはまだ差があると感じた。カナダチームがロブボールをマスターしたとき、彼らは世界の強豪チームの仲間入りすることだろう。

試合中、「目を切るな!」と指示が飛ぶことがある。近年は雪合戦の競技レベルが上がり、コート後方にいるBKの選手でも、背中を見せたり、相手チームから目をそらすと、たちまち鋭い雪球に狙い撃ちされる。油断は禁物である。

最後にチームワーク。この最大のポイントは雪球の補給である。センターシェルターまで戦線が伸びたとき、最前線まで確実に必要な雪球を送れるか。このことは勝敗を左右する重大事である。また最前線のプレーヤーが狙われたとき、その攻め手の相手プレーヤーを逆に攻め返す援護射撃ができるか、その連係プレーも大切である。劣勢の展開になったとき、次のフォーメーションを全体が意思統一して戦えるか。乱戦になったとき、フラッグを誰が守るのか、プレーの役割分担や意思の疎通ができているか。相手のフラッグを狙って誰が疾走するのか。監督の指示で全体が動けるかなどが含まれる。



❄ 町民全員参加型の実行委委員会

ルールづくり、用具開発と並行して、1988年7月1日に、昭和新山雪フェスティバル実行委員会が結成された。これまでの町内のイベントの実行委員会は、「火まつり」は観光関係者、「りんごまつり」が農業者が中心となっていた。阿野は、この冬の新しいイベントは、多くの運営スタッフが必要と考え、町内の32あった団体すべてに協力要請をした。それは、経済団体、スポーツ団体、文化団体、教育団体、青年団体、女性団体、ボランティア団体、そして企業へも職員の派遣を要請した。実行委員会には延べ400人の町民スタッフが集結した。後述のように、町内の事業経営者、農業者、学校の先生、銀行員、郵便局員、病院職員、会社員、商店店主、神主、僧侶、主婦など多種多彩な人材が参画した。

第7回大会(1995年)当時の役員は次のとおりである。

- 実行委員長・・・阿野康春(観光業役員)
- 副実行委員長・・・山中漠(総務担当・レストラン自営)、千田重光(競技担当・郵便局職員)、堀口一夫(事業担当・電気会社員)、毛利順一(施設運営担当・運輸会社員)
- 統括・・・浜田英彰(果樹園自営)、補佐・・・松本勉(福祉施設園長)
- 総務委員長・・・山名勤(会務兼務・病院事務長)松永美継(広報・渉外担当・神官)、毛利敬一(協賛・観光業自営)
- 競技委員長・・・阿野光弘(旅館業自営)栗島清(用具担当・会社員)、長内伸一(競技運営担当・農業自営)、安宅拓二

- (審判担当・果樹園自営)、松本仙史(審判担当・農業自営)、毛利貞秀(審判担当・会社員)、木村義道(審判担当・農業自営)、井上官成(観光業自営)
- 事業委員長・・・矢野守(果樹園自営)、岩倉光良(式典担当・ガソリンスタンド自営)、齋藤誠市(イベント担当・農業)、工藤敏文(イベント担当・農業)、阿野裕紀緒(事業担当・果樹園自営)
- 施設運営委員長・・・小野芳照(建設業自営)、毛利泰人(施設担当・旅館業自営)、堀口博(管理担当・水道業自営)

交通指導については壮瞥町交通安全協会・壮瞥町交通安全推進委員会に依頼。

- 監事・・・戸田忠昭(観光業役員)、福田茂之(ホテル支配人)

救護は、そうべつ温泉病院、三恵病院から医師と看護師を派遣してもらった。そして名誉実行委員長には、参議院議員でJOC委員でもある橋本聖子さんに就任をお願いした。橋本さんは、壮瞥町と同じ北海道胆振地方の早来町(現・安平町)出身で、冬季オリンピック・スケート競技のメダリストであり、夏の大会でも自転車競技で出場するなど、自他ともに認める「オリンピックの申し子」である。自らも、「聖子隊」というチームを率いて何回も昭和新山の雪合戦大会に出場していて、スポーツ・雪合戦への理解も深い方である。

実行委員長は初代阿野康春(1988年7月～1997年4月)につづき、2代目堀口一夫(1997年5月～2007年4月)、3代目松本勉(2007年5月～2016年4月)が務め、現在は第4代の阿野裕司(2016年5月～・初代実行委員長・阿野康春の長男)が就任している。

当初のイベント名は「昭和新山国際雪フェステバル」。そのメインイベントが、「昭和新山国際雪合戦」という位置づけであった。これは「アイデア検討会」で出された意見を少しでも取り入れ、サブイベントを含めた総合的な冬

のイベントの色彩を演出するためである。その後雪合戦大会が脚光を浴びようになり、1997年7月から、「昭和新山国際雪合戦」と改称した。ただ、来場者に対するサブイベントはいまも継承されている。

実行委員会の構成

実行委員会は4つの専門委員会で構成されている。総務委員会は、会計・記録・賞品・救護・庶務を担当する会務部会、協賛金を担当する協賛部会、チームの募集・招請・受付・受け入れを担当する渉外部会、大会のPR、マスコミ対応、ポスターの製作を担当する広報部会の4部会。

競技委員会は、審判員の養成・確保、審判員講習会を担当する審判部会、大会の運営(試合進行管理、試合会場管理、雪球製作管理)を担当する競技運営部会、雪合戦用具の保管・管理・改良・開発、雪球づくりの指導を担当する用具部会の3部会。

事業委員会は、開閉会式の進行管理、セレモニーの演出を担当する式典部会、サブイベントの開発・運営を担当するイベント部会、出店・催事・キャラクターの開発と管理、歓迎レセプションの運営を担当する事業部会の3部会。

施設運営委員会は、会場設営(コート・サブイベント会場)を担当する施設部会、会場内のプレハブ施設(協議本部・休憩所・トイレ・出店・催事)の設営と管理、用具の貸与を担当する管理部会、交通整理計画の立案と、会場内の交通案内を担当する交通指導部会3部会がある。

総務委員会

総務委員会の会務部会は、大会本部前に設置された大きな決勝トーナメ

ント掲示板にハシゴをかけて表示し、大会記録を整理するとともに、厚生労働省・北海道からの優勝旗・メダル、各協賛スポンサーから提供された賞状・賞品、実行委員会の用意した地元の特産品の準備をする。年々、上位入賞チームへの協賛企業からの賞品が増加し、特に優勝チームには数多くの賞品が何回も渡される。大相撲千秋楽の優勝力士への表彰式を思い出す。ちなみに、壮瞥町は、第55代横綱北の湖の出身地でもある。ユニークなのは、りんごの木のオーナー賞である。「くだものの里・壮瞥町」をPRするとともに、りんごの花見・収穫で、また壮瞥町に来て下さいというメッセージが添えられている。地元が開発した「りんごのシードル」「りんごジュース」や、壮瞥温泉地区のホテル宿泊券も商品として提供されている。

協賛部会は、12月にはいると、協賛企業、地元企業や商店等を回り、イベントへの支援を呼びかけた。このイベントが30年続いた背景の大きな要因のひとつに、協賛企業・事業所・商店の力強い支援がある。協賛各社のご理解とご支援には感謝の気持ちで一杯である。

渉外部会は、大会告知をするとともに、海外や道外チームの招請に動いた。受付・受け入れの前段階として、プラッカード、ゼッケン(当初は各チームに固定のゼッケンを渡していた)、プログラム、大会案内の関係資料の袋詰め作業を進めた。

広報部会は、ポスター製作にはいる。大会のポスターは毎回話題になっている。これまで地元の小学生の書いた雪合戦プレーヤーの顔が採用されたり、瀧不動地吹雪太鼓の親方・堀口一夫さんの気合いの入った勇姿、町内の強豪チームで過去優勝経験のある、「オロフレ百姓一気ズ」「鉄骨娘」の選手が「かかってこいや!」と挑発するものもあった。昭和新山熊牧場のヒグマのユーモラスな姿がモデルとなったポスターも評判となった。「キング・オ

ブ・スノー」キャッチフレーズで紹介された。堀口氏の長男・正章さんがイラスト風に取り上げられたこともあった。第29回大会のモデルになったのは、前年の大会のレディースの部で3連覇を達成したMISKY(胆振支部)、岩崎千春さんのヘルメット姿である。ヘルメット開発のコンセプトのひとつとして、女性がこのヘルメットを着用して、雪合戦をしたいと思うようなものとあった。女性プレーヤーが、りりしく、美しく見えるこのポスターは、この目的を達成しているといえる。

マスコミの対応、情報の提供は重要な役割である。そのためには、担当者は、スポーツ・雪合戦開発の経緯、歴史、ルール、普及状況、今大会の目玉などあらゆる雪合戦情報を持っていなければならない。

競技委員会

審判部会は、審判員養成のための講習会を何回も開催した。スポーツとしての雪合戦の真髄であるルールを正確に理解するとともに、実際にコートに立って実技を繰り返した。正確な判定をするために、プレーを見る位置どり、ジャッジのジェスチャー、試合前に両チームに伝える事項、雪球の数および硬さのチェックなど、審判員が求められる知識と任務について研修を深めた。普及拡大を図るため、ルール解説ビデオも作成した。大会の回数を重ねるごとに、北海道各地で、この種の審判講習は数多く開催されるようになった。また、当初雪原に朱墨を使っていたコートのラインは、繊維のロープに変更した。時計や記録を担当する女性スタッフの防寒対策として、ミニ・ビニールハウスがセンターラインの側に設置された。常に現場の声を大切にし、改善を重ねた。

競技運営部会は、運営のシステム化に腐心した。試合開始30分前に選手

名簿の受付を行う。受付印をもらうとカードを雪球係に提示し、雪球ケース6箱を受領する。雪球製造場所に移動し、担当者の確認を受けると1箱45個、1試合に使用する270個の雪球をつくる作業に入る。このとき各チームには2台の雪球製造器が貸与される。雪球が完成すると、各チームは指定されたコートで待機する。直前の試合が終わると、チームはコート内に入り、審判員に選手名簿を提出するとともに、雪球のチェックを受ける。3セットマッチの試合が始まる。勝敗が決すると、勝利チームの監督が記録用紙に確認のサインをする。残球は廃棄され、雪球ケースは雪球係に返却される。これが一連の流れで、近年はこの方式が定着している。システム化したこの大会運営は、毎年各地から訪れる視察者が注目する部門のひとつでもある。

用具部会は、事前に雪球製造器に不備がないか、審判部会と協同してのヘルメットの安全性のチェックを行い、大会当日は雪球づくりの指導、雪質の調整、用具改良の提言を行っている。特に雪質の調整は、雪球づくりの重要なポイントで、ビニールハウスにジェットヒーターを設置し、水分を含ませ雪を柔らかくして、雪球がつくりやすい良質の雪を供給している。用具の保管は「雪合戦倉庫」と呼ばれている保管場所で一括管理されている。

事業委員会

厳寒の早朝4時30分、堀口一夫をリーダーとする「滝不動地吹雪太鼓」のメンバーで編成されている事業委員会式典部会は、選手の集合場所、入場行進の手順、整列位置の確認に余念がない。特に第1回大会では、演出に使用する風船の準備に時間を要した。これはこの大会が、昭和天皇が崩御された、平成元年から始まったことに起因する。国民が等しく喪に服するため、歌舞音曲のような華やかな催しは自粛された。このイベントの開催にも賛否が

あった。結論としてイベントは実施するが、派手な演出は取りやめ、ファンファーレとともに、風船を飛ばすことに落ち着いた。第2回大会からは演出に花火が取り入れられた。当初は5段雷の花火であったが、現在は、花火業者と相談し、「雪球イメージ花火」となった。大会の開始を知らせるファンファーレとともに、雪球をイメージする火玉が昭和新山の空に上下・前後・左右に乱舞し、雪合戦気分は大きく盛り上がる。聖火台に点火する聖火は、1989年に開催された「はまなす国体」の際、昭和新山の最高温地帯の亀岩で採火され、記念塔で保管され燃え続けている「胆振のいぶきの火」が使用されている。この火は2日間の大会中燃え続け、雪合戦の熱闘を見守っている。記念塔からの採火、聖火台への点火のリハーサルも実施され、万全の準備が整った。

イベント部会は、観客や試合を終了した選手を対象に、昭和新山のスロープを活用したタイヤジャンプ、昭和新山ウルトラクイズ、雪合戦3種競技、ターゲットバードゲームなどのサブイベントの開発と当日の運営に当たった。

事業部会は、町内の商工業者や農業団体に呼びかけ、イベントへの出店を募った。特産品PRコーナーの運営や雪合戦グッズの販売も担当した。。第1日目の試合終了後に開催される「歓迎レセプション」会場の設営、アテンドも担当し、ドラム缶を半分に切り、その上に鉄板を敷いて焼くジンギスカンは、野趣あふれた北海道らしい豪快な野外パーティーとなっている。

「雪合戦鍋」も大会の名物になっている。地元の女性団体グループが30年間、寒いなか激闘する遠来の選手や観客をもてなすために続けているもので、当初の豚汁から進化し、「雪合戦鍋」に至った。鱈のすり身を使い、雪玉のイメージを創り上げ、味噌仕立ての鍋料理となっている。第30回大会で

は、32名のスタッフが、850食を作り、午後1時には完売したという。

1999年12月には待望のマスコットキャラクターの熊が完成した。その名前を全国に公募した。1,700通の応募があり、親しみやすく、覚えやすい、さらに試合に勝ち進んでいく「強さ」「ラッキー」を兼ねて、「ブラッキー」と命名された。大会期間中は会場内を歩き回り、みんなの人気者になっている。

❄ 施設運営委員会

施設部会は、雪合戦コートづくり、雪球製造場所のビニールハウス設置、サブイベントコース整備を行う。コートづくりで苦勞するのは、シェルター・シャトーと呼ばれる雪の壁である。ここでは大工さんの知恵が発揮される。

建設業を営む施設担当委員長の小野芳照は、建物建築の際の基礎工事の手法を応用し、その作製を提案し、小野の指導により作業は進められた。また、当初、雪球は野積みした雪山にジェットヒーターを当てて、雪質を柔らかくして行われていた。この方法では、熱効率が悪く、大量の良質の雪を短時間に確保することが難しかった。職業柄ビニールハウスの効果を熟知している農業者の提案により、ビニールハウス内に雪を保管する方法が採用された。北海道の雪質は、パウダースノーと言われるように、水分が少なく、そのままでは雪球にはならない。ビニールハウスを設置することにより、外気を遮断するとともに、ジェットヒーターによりハウス内に熱を送る。温度を上げることによって、雪に水分を与える。このことによって雪は丸く固まる条件が整う。これまでの30回の大会中、雪不足に悩むときもあった。このときは、壮瞥町建設協会が率先して協力を申し出てくれて、地域貢献支援により、大会会場から25キロ離れたオロフレ峠から雪を運んでくれた。

管理部会は、会場内の休憩スペース、救護など会場内各所にあるユニット

ハウス、雪球製造場所のジェットヒーターの管理と燃料の補給を主な任務とされた。

交通指導部会は、交通整理計画を作成し、早朝5時30分より、会場内の交通指導と整理に当たった。前夜よりこの大会に参加するため、バスで遠征してくるチームが早朝に到着するための対応も必要であった。この部会は壮瞥町交通安全協会、交通指導委員会に協力要請した。

各委員会は雪合戦にこだわり、知恵と汗を流した。選手・観客を温かく迎え、満足してもらうための趣向が、すべての部会で検討された。

❄ ローカルからグローバルイベントへ

試行錯誤を繰り返しながら、70チームの参加を得て第1回大会は終了した。第2回大会は80チームの募集で始まったが、マスコミ報道やビジュアル資料の整備により、参加チームは苦労少なくスムーズに進んだ。特に、第1回が近隣市町村からの参加が多かったのに比べて、遠方からの参加チームが増加した。スポーツ・雪合戦が北海道各地に知られるようになってきた。第3回大会から実行委員会統括に山中漠が就任し、事務局に谷岡康徳が配置された。山中は3回目の開催がイベントの将来を決定すると考えていた。華々しい幕開けをしたが、単なるローカルイベントで終末を迎えるのか。あるいは更なる飛躍をして新しい展開が起きるのか。そのため、大会規模も出場枠を150チームと、これまでの倍増とした。また、女性の参加者が多くなってきたことから、これまで男女混成としていた条件から、レデイス部を新設し、より多くの女性競技者の参加を促すこととした。

この頃には、スポーツ・雪合戦参加希望が急増し、結局150チームの募集に対して、参加申し込みのあった173チームすべてを受け入れることとし

た。事務局は大忙し。ヘルメット、雪球製造器、ゼッケンなど、雪合戦用具の確保に奔走した。当時は、宿泊の紹介・調整も事務局が行っており、募集の始まった12月20日から2月末の大会終了まで、事務局の作業は休日返上、毎日深夜まで続いた。谷岡は十二指腸潰瘍で5日間入院した。退院したデスクの上には処理すべきメモが山積みになっていた。大会終了後、スポンサー企業の代表から、「これからも雪合戦を応援します」と言葉を頂いた。谷岡の眼から一筋の涙が流れた。ひとつの大きな山を乗り越えた安堵と、今後の展開への決意が込められた涙だった。

昭和新山国際雪合戦には、当初からサッポロビール、日本航空はじめ多くの企業協賛を頂いた。また、カラカミ観光など地元の企業、商店、事業所からも多大なるご支援もあった。単なるローカルイベントで終わるかもしれない、この未知のイベントを暖かく見守り、育ててくれた、歴代の多数のスポンサー各位に心よりお礼申し上げたい。

財政基盤が脆弱であった草創期にはには、北海道観光連盟(第1回から第3回まで)、北海道(第4回から5回まで)、厚生労働省の勤労者ふるさと交流会の補助金(第6回から第16回まで)を受けた。一地域のローカルイベントではなく、北海道、いや雪で呻吟する全国すべての地域にも波及効果のあるイベントにしたい。壮瞥町というローカル性と、グローバルな国際的拡がりを持つイベントに育てたいという当初の目標は、いま、ローカルとグローバルを合体させた「グローバルイベント」として、ようやくそのスタートラインから走り始めた。これまで、深いご理解とご支援を頂いた、スポンサー企業や関係団体の皆さんに、深甚なる敬意と感謝申し上げるとともに、今後とも、昭和新山国際雪合戦への応援を切にお願いしたい。

❖ 全国に雪合戦の輪を広げたい

雪国の共通のスポーツ文化として、スポーツに進化した雪合戦を全国的に普及したい。実行委員会は、これまで冬のイベントとして雪合戦を実施している各地にスタッフの派遣をした。これは各地の開催状況を確認するとともに、実施にあたって課題になっていること、ルール上の疑義をヒアリングするためである。

谷岡は、山形県新庄市、群馬県水上町、富山県城端町、鳥取県若桜町を歴訪し、ルール解説、用具の供給、運営方法等のアドバイスをを行った。地域おこしの視点から、南アルプスをその行政区域に持つ静岡市の、「リヴァウェル井川スキー場開場5周年記念雪合戦」には、山中統括と谷岡が派遣された。1991年の長野県山ノ内で開催された「国際雪合戦竜王大会」には千田と谷岡が飛んだ。北海道津別町で開催された、北見地区スポーツ指導員研修会では、注目される冬のニュースポーツとして声がかかり、講演と実技を行った。長野県飯山市では、国土庁（当時）が主催した「SNOW JAM2001」のイベントで、首都圏の子ども達を対象として、雪合戦の楽しさを伝えた。札幌市で開催された「雪氷学会」では、谷岡が事例報告した。実行委員会は、全国各地から要請があると、スタッフを派遣し、スポーツ・雪合戦の普及活動を積極的に行った。

1993年9月16日、(財)地域活性化センターからは、地域イベント優秀賞を頂いたが、その東京都内での表彰式のプレ

ゼンテーション終了後、一人の男性が谷岡に話しかけてきた。「谷岡さん、広島でも雪合戦をやってみたい。ルールや用具について教えて欲しい」。この人が、広島県高野町の根場祐治さん。根場さんは広島県雪合戦連盟の初代会長に就任し、山陰・山陽地方の雪合戦の普及に大きな力を発揮する。広島県、島根県の雪合戦のレベルは高い。

❖ 東京のマスコミに売り込む

壮瞥町民が創り上げた冬のニュースポーツに対して、北海道新聞社、道新スポーツ、地元の室蘭民報社は多くの機会に報道してくれた。マスコミの皆さんがこのイベント広く周知し、普及発展を支援してくれた。深く感謝申し上げたい。実行委員会としては、単なる一地域のローカルイベント、北海道限定のイベントで終わるのではなく、雪国の新しいスポーツ文化として、その知名度を上げ、全国的に普及することを目標としていた。そして、道外からの観光誘客を目指した。そのアクションが必要と感じた。その方策として在京のマスコミを訪問することとした。

1993年11月中旬、山中漠統括、広報担当の浜田英彰、松本勉の3人は、サポートする協同広告の菊池氏とともに、東京のテレビ局・新聞社・出版社を訪れ、情報を提供し報道の協力を要請した。訪問の趣旨が相手によく伝わらなかったのか、対応してくれたのは広告部門が多く、真剣に話を聞くと言うより、何か難題を持ち込まれたかのように懐疑的で困惑していたという。派遣メンバーには手応えの弱さに徒労感と空しさだけが残し、重い足取りで帰道した。

そのなかで、一社だけ真剣に話を聞いてくれた人がいた。朝日新聞東京本社の高橋町彰さんである。高橋氏は北海道深川市の出身で、同郷のメンバーが語るスポーツ・雪合戦に興味を示してくれた。1993年12月1日、朝日

新聞の朝刊に、「町おこしの国際雪合戦、全国規模に、北海道壮瞥町」のタイトルで、全国版で掲載報道された。その日を境に、マスコミからの問い合わせが殺到し、ラジオへの出演依頼、テレビ番組製作への協力要請、雑誌の取材が多数寄せられた。人口3,000人余の小さな町の雪合戦の事務局を担当する観光係長が、テレビ番組製作への協力、ラジオへの出演、新聞・雑誌の取材を1年間に23回も体験する珍現象が生じた。

❄️雪さえあればどこでもできる！

雪合戦は、雪さえあれば、いつでも、どこでも、誰でもできる。そのことを示したのが、香川県高松市での雪合戦大会の開催である。

高松市は瀬戸内海に面し、温暖で雪とは縁のない地域である。古老の話では昔は少し降ったこともあるが、近年は温暖化が進み、雪の話題はないという。消費者金融の大手、プロミスのおオーナー神内力さんは、1955年4月に高松市と合併した十河村の出身である。神内氏は故郷を元気づけるイベントが何かないと模索していた。プロミスにも昭和新山国際雪合戦のスポンサーになって頂いた時期があった。丁度、プロミスの北海道支社設立30周年記念の事業として、北海道喜茂別町で保存されていた雪を使用した、「夏の雪合戦」が昭和新山山麓で実施された。

この経験をもとに、1993年2月21日、神内氏は故郷で、「国際雪合戦フェスティバルin十河」と名付けた雪合戦大会を開催することを計画した。35チームが参加した。コートに雪は、新潟県から、雪球に使用する雪は北海道京極町から段ボールに入れて運んだ。瀬戸大橋を渡り、段ボールに入った雪が十河地区に運ばれる。会場となった学校のグラウンドには、運動会のようにロープで区切られた観覧席が設けられた。敷かれたござに正座し、お年寄り

は拍手で遠来の雪を迎えた。段ボールから真っ白な雪がグラウンドまかれると、大きな歓声が上がった。このイベントには安宅拓二など5名の昭和新山国際雪合戦実行委員会のスタッフが運営や審判員として参画した。地元放送局が番組製作をし、筆者も解説者として現地に行った。初めて体験する「スポーツ・雪合戦」だったと思うが、随所に好プレー、珍プレーがあり、驚きと笑いが交錯した。大会終了時には、気温も上がり、コートは泥混じりの雪となったが、子ども達はその雪を口に入れて、感触を確かめていたのが印象的であった。段ボールに残った雪を、こっそり自宅に持ち帰る「ちゃっかり屋さん」も出現したとか!?雪のない地域に雪を持ち込んで開催された「雪合戦」は、雪国で開催するのとはひと味違うインパクトを地元に与えた。

❄ 昭和新山国際雪合戦に出場したい！

大会の日程は2日間。予選は3チームによるリーグ戦を行う。したがって、大会運営上、出場チーム数は150チーム前後に限定せざるを得ない。そこで、各地区で雪合戦大会を開催してもらい、上位入賞チームに本戦出場権を与える方式が導入された。そのなかでも、実行委員会推薦枠や一般枠が若干の残されており、その出場枠獲得のため、懸命のアピール合戦が続く。

「我々M物産は、世界に営業拠点があります。雪合戦の国際化に貢献できます!」、「これから高速道路で札幌から直接出場申込書を持参します。この熱意を汲んでください。」、「実行委員会のAさんとは親しく交際させて頂いております。新戦法で大会を盛り上げます!」、「中学生は、昭和新山を目指して放課後一生懸命練習してきました。その努力に夢を与えて下さい」。有り難いことです。このような熱心な雪合戦愛好者によってこのイベントは支えられているのである。実行委員会は、その選考にあたっては、嬉しい悲鳴を上

げ、頭を悩ますことになるが、雪をも溶かすような、雪合戦への熱い想いに圧倒され、この4チームとも出場権をゲットした。白煙を上げる昭和新山の下でプレーすること、雪合戦の聖地「昭和新山」は雪合戦愛好者の憧れの地になりつつあった。

❄️ 雪合戦のウインブルドンをめざして

雪合戦は、雪さえあれば、いつでも、どこでも、誰でもができるスポーツである。雪を新潟県と北海道から運んで実施した香川県高松市、人工降雪機を使用した中国、オランダ、ベルギー、タイ。雪を保存し、夏の雪合戦を実施した北海道喜茂別町、北竜町、山形県飯豊町、岩手県沢内村などの例が証明している。学校の広いグラウンドを使うと、もっと多くのチームが参加するマンモス大会の開催も可能であろう。

そうであるから、スポーツ・雪合戦発祥の地であり、白煙を上げる昭和新山の下で行われる「国際雪合戦」は、他の地域から模範とされ、選手が目標とする大会でなければならない。運営役員が高い目的意識を持つこと、競技レベルが世界一高いこと、世界そして全国の審判員の研鑽の場であり、そこで審判することが誇りに思えること、会場設営や大会運営が、他地域のモデルとなるように、スムーズでシステム化されて効率的であること、参加者や来場者に適切かつ暖かいおもてなしの配慮ができることが必要である。この崇高な理想を実現するため、町民スタッフの合い言葉は、「雪合戦のウインブルドンになろう」である。

観光客が行き交う昭和新山のお土産屋さんの前の広場に、「センターコート」がつくられる。この立派なコートでは、一般の部とレディースの部の決勝戦2試合しか行わない。また、前年度優勝チームの栄誉を称え、そのチーム

題には1年間「ゴールドゼッケン」着用の特権が与えられる。各チームは、センターコートで試合すること、ゴールドゼッケンを着けることを目指して覇を争う。これらも雪合戦の聖地としてのこだわりである。

「昭和新山」で勝利の栄冠をつかむこと、それが名実とも雪合戦の「世界チャンピオン」である勲章となるよう、運営も審判もそして試合内容ももっと磨かれていかなければならない。

日本雪合戦連盟の設立

スポーツ・雪合戦は北海道各地に広まるとともに、全国各地でも開催されるようになった。そこで情報の共有、更なる普及拡大を図るため、1993年2月26日、日本雪合戦連盟の設立総会が、壮瞥町のホテル洞爺サンパレスで開催された。加盟したのは、北海道(1993年2月結成)、青森県(1993年1月結成)、岩手県(1992年3月結成)、長野県(1993年1月結成)の1道3県であった。総会の議事では、規約を制定した後、加盟団体の拡大、審判員の公認申請(ライセンス制の導入)、用具の開発などの事業計画が承認された。初代会長には北海道連盟の阿野康春が就任した。他の役員は、副会長に、石田憲久(青森県協会)、堀田佳夫(岩手県連盟)、牧野和宏(長野県協会)、監事に、小林寛基(北海道連盟)、高屋敷日出夫(北海道連盟)の各氏を選出した。

各連盟は、県内の雪合戦普及発展を図るとともに、お互いに係し雪合戦の輪を他の地域に拡大することを確認した。連盟の結成とともに、情報の共有を図るため、事務局を担当する壮瞥町から、日本雪合戦連盟会報、北海道雪合戦連盟会報が発行され、情報の発信が本格的に始まった。会報では、各地の雪合戦情報、ルール改正の周知などが行われた。連盟事務局が観光協会に移ると、情報発信はなくなった。現在は、2008年1月に創刊された、

「YUKIGASSEN Magazine」(発行・NPO法人雪合戦インターナショナル、編集人・山田雅志氏)が情報発信している。全国の幅広い雪合戦情報が掲載されている同誌は、雪合戦愛好者の必読書になっている。「雪合戦マガジン(VOL10・平成29年1月15日発行)」によると、2017年には、九州から北海道まで36の雪合戦大会が開催され、夏のビーチや屋内の大会も17回企画実施されている。

地域づくり国土庁長官賞を頂く

1996年11月16～17日、地域づくり全国大会(当時の国土庁主催)が熊本県水俣市で開催された。昭和新山国際雪合戦はその表彰候補としてノミネートされた。全国大会の前に、事前審査のため2名の審査員が壮瞥町に来町された。伊藤滋(現・東京大学名誉教授、当時・慶応大学教授)、大田弘子(現・政策研究大学院大学教授、当時・大阪大学経済学部客員助教授)の両氏である。伊藤氏は北海道小樽市出身の作家・伊藤整のご子息ということで、雪の記憶があるかもしれない。

一方、大田さんは、鹿児島島の出身であり雪になじみがなかったかもしれない。雪合戦をビジュアルにご理解頂くために、映像や写真をふんだんに使った資料を用意し説明した。世界初の「雪合戦ルールブック」「雪合戦用ヘルメット」「雪球製造器」展示し、町民の知恵と汗の結晶を見てもらった。

全国大会には、阿野康春実行委員長、佐藤正敏事務局長、事務局次長の谷岡康徳が出席した。15分間のプレゼンテーションは谷岡が担当した。雪に縁のない南国・熊本県での開催なので、スポーツ・雪合戦をどのように理解してもらうか、その楽しさをどのように伝えるかに腐心した。プレゼンの前半は、ステージの大きなスクリーンに、雪合戦大会のVTRを流した。これでス

スポーツとしての雪合戦をイメージしてもらった。後半は、北海道からこの大会に参加された道庁職員や道内の市町村職員の協力を得た。雪合戦用のヘルメットをかぶり、ステージに発砲スチロール製のシェルターを設置し、雪球は運動会に使用する玉入れの白球を使用して雪合戦を実演してもらった。「北海道遺産」にふさわしく、オール北海道の熱演であった。流れ球が来賓席に飛んだ。来賓席からその球がプレゼン席に返球された。「雪合戦万歳、熊本県知事・福島じょうじ」とペン書きされていた。壮瞥町民が開発した雪国の新しいスポーツ文化が、雪の降らない南国の人々にもその楽しさを共感頂いたのかなと感激し、冷たくないその雪球を思わず握りしめた。このとき、昭和新山国際雪合戦実行委員会は、「地域づくり大賞」と「世界に開かれた小さな都市」の2つの賞を頂いた。

これには後日談がある。審査委員(10名で構成)を務められ、事前審査で来町された大田弘子さんは、政策研究大学院大学教授であった2006年～2007年に、第1次安倍内閣、福田内閣で、民間から登用され、経済財政担当特命大臣に就任された。エコノミストとして、以前から政府の政策研究委員として会議に出ることが多かった氏は、あるとき当時の小泉総理と雑談した際、「北海道で雪合戦で地域おこしをしている町がある。」と話した。小泉総理は「変わったことを考える人達がいるんだね。」とコメントしたという。大臣退任後、2008年11月14日、北海道室蘭市で開催された、北海道新聞社主催の政経文化講演会に講師として来蘭された大田さんにお会いしたとき聞かされた。

小泉元総理に「変ったことを考える人達」と称されたことは、知恵と汗を出し、独創性のあるイベント開発を推進してきた実行委員会のメンバーにとっては、最大の褒め言葉ではないだろうか。

❄ オーストラリアで初の海外雪合戦

昭和新山国際雪合戦は、海外のマスコミ取材もあった。1991年にはトランスワールドスポーツ・インターナショナル(イギリス)が初めて取材放映(同社は1992年も取材放映)。1992年にはオーストラリア放送協会、スウェーデン国営放送が取材放映、1995年にはフィンランドの民間放送、2004年にはウォール・ストリート・ジャーナル(アメリカ)の取材も受けている。また、1994年12月には英語版のルールブックを作成、2004年10月には、英語、中国語(簡体字・繁体字)、ハンゲル語の雪合戦PRビデオを作成している。また、2005年1月には、スポーツ・雪合戦の普及と、町民と東アジアの人達との交流を目的として、昭和新山で、第1回の東アジアスポーツ雪合戦大会を開催、以後3回開催された。これには中国、香港、台湾、韓国の観光客70名が参加した。

さて、話は戻って、1992年5月7日、オーストラリアビクトリア州マウント・ビュラスキー場のジェフ・ハリソン氏(「88.0 MHz・SNW-FM」取締役)からコンタクトがあった。同スキー場に雪合戦アリーナを設置し、オーストラリア、ニュージーランド地域の雪合戦をプロモートしたい。実施にあたり、日本で制定されたルールと用具の提供、指導のためのスタッフ派遣をお願いしたい。このためにかかる宿泊費、交通費、派遣にかかる諸費用はハリソン氏側が負担する。雪球製造器1台と2チーム分のヘルメットも購入したい。オーストラリアのスキーシーズンは、6月5日から9月30日であり、この期間

中に実施したいという内容である。

1992年2月開催の第4回昭和新山国際雪合戦において、オーストラリア放送協会は、海外特派員のレポートとしてこのイベントをオーストラリア国内で紹介した。この報道にスキー場関係者が強い関心を示し、南半球で初の雪合戦開催の気運が盛り上がったということであった。

初めての海外からの要請であり、国外への普及活動である。実行委員会は、競技委員長の千田重光(郵便局職員・47歳)と事務局次長の谷岡康德(壮瞥町役場商工観光係長・41歳)を派遣することとした。これとは別に、昭和新山国際雪合戦で第1回・第2回大会を連覇した「北電電気温水器軍団」の監督・齋藤雅次(北海道電力社員・36歳)は、北海道電力内の研修資格獲得のための論文に挑戦、見事合格しオーストラリアに同行することになった。論文のテーマはもちろん「雪合戦」。齋藤監督は、試合中は電力会社ならではの仕事の符帳を使い、プレイヤーにサインを送るヘッドワーク巧みな監督である。デモンストレーターとして同行してくれることとなった。

7月24日、千田と谷岡はシドニー経由でメルボルンに着いた。現地へ移動する前日の25日、2人は通訳の田中宏太郎氏(早稲田大学卒・日本語学校教員)とともに、10万人収容するというメルボルンのスタジアムで開催されていたメルボルン対リッチモンドのフットボールの試合を観戦した。試合は白熱し、観客の応援のボルテージは高まる一方であるが、最も注目したのが審判の節度のある動き、適正な位置取り、正確な判定とちょっと派手目なジェスチャーである。特に得点したときは、審判員が持つ大きなフラッグが数字の8の字に振られ、最後は高々と上空に突き上げられた。観衆はその動作を見ながら立ち上がり、さらに熱狂する。ゲームの主役はもちろんプレイヤーであるが、その演出者としての審判員の存在も重要と感じた。審判員の最大の

責務はプレーに対して、正確、迅速な判定をすることであるが、試合を観戦している観客にもよく分かるようなジェスチャーをする丁寧さと、ゲームを盛り上げる演出者の役割りもあるように感じた。帰国後、雪合戦でも、「フラッグ奪取」「全員アウト」のような最高のプレーには、判定のジェスチャーも波多を派手に大きく振ってはどうか。反則があって試合を止めるときは、観ている人にも分かりやすいようにアメリカンフットボールのイエロータッグに相当する、「レッドボール」を導入してはどうかと提案した。2年間試行してもらったが、審判員の負担が大きいと継続されなかった。日本人の心情として、「チームフラッグ奪取」される屈辱を味わっている敗者への惻隱の情なのか、現状は、確認した審判員が、右手を上げてグルグル回す地味なジェスチャーとなっている。

7月26日11時35分、齋藤監督がメルボルン空港に着いた。齋藤氏は直ちに函館市の自宅に国際電話。「着いたのーー！」と絶叫する奥さんの声が、そばにいた私達にも聞こえるくらいであった。初めての海外旅行が南半球のメルボルンと聞いて奥さんは出発前から心配していたという。当人は好きな雪合戦の海外普及活動への参加でニコニコしていたが……。

スペンサー駅から、ここから通訳をお願いした阿部嘉治さん(メルボルン大学院生)を含めた4人は、列車でマンسفールドまで3時間の移動。マンسفールドからバスに乗り換え目的地のマウント・ビュラーへ向かう。マウント・ビュラーは、メルボルンの北東320キロ、マンسفールド近くにあるマウント・ビュラー山(1,804メートル)の山麓にあるリゾートスキー場である。50のスキーコースと23基のリフトを擁するオーストラリア屈指のスキー場である。定住人口は500人であるが、年間40万人の観光入りコミがあるという。メルボルン市内や、車窓から見た郊外の風景には雪の気配は全くなかつ

た。やがてバスは山道を上り始め、標高が上がるにつれて雪がちらほら見えてきた。マウント・ビュラーに到着したときは、一面雪景色である。ジェフがバス停まで迎えに来てくれていた。ジェフ・ハリソン氏は、リゾート地であるマウントビュラースキー場の運営企画を任されており、FMラジオ(SNO・FM)のパーソナリティも務めている。40万人のスキー愛好者に情報を提供している地元の有名人らしい。自己紹介では、16歳の時から放送関係に関わっており、アイルランド出身の34歳、3年前からマウント・ビュラースキー場で仕事をしているという。FM放送ではしきりに雪合戦を「SNOWBATTLE(スノーバトル)」と紹介、PRしている。

ジェフの案内で、雪合戦会場となるテニスコートと、日本から送った用具の確認を行った。シェルターとシャトーはすでにできていた。いつ雪合戦をやるのかと尋ねるとはっきりした返事がない。スキー学習に来ている学生を対象とした雪合戦のようであるが、どうやら相手方との話がきちんと決まっていないうだ。決まり次第連絡するからスキーでも楽しんでくれと言われた。何ともラフな計画だ。几帳面な日本人としては、このオーストラリア流おおらかさに戸惑い、かすかな不安が生じた。私達4人は徒歩でコートに向かい、どのような流れで、どのように雪合戦の指導をするかについてシェルターを使いながら確認し、練習した。

宿泊先はジョージとエリアの老夫妻が経営するペンション「ランタンロッジ」。息子さんと若いシェフの4人のスタッフで運営している。リビングルームの暖炉の火が暖かく私達を迎えてくれる。日本から持参した、熊の木彫りのキーホルダー・ハンカチ・雪合戦のキャップをプレゼントする。ジョージは早速キャップをかぶって大喜び。夕食には、アルコール度40度の「シュナップス」、スコッチ、ビールと飲み物がでて、私達を歓待してくれた。ペンションで

はアメリカ・テネシー州からスキーレッスンに来ていたウオン・スーザン(13歳)とその母親と同宿した。中国出身の父親とアイルランド出身の母親のもと、ジャイアントスラロームの強化練習で来豪しているという。将来はオリンピックに出たいと抱負を語っていた。雪合戦の話をしたら興味深そうに聞いてくれた。

7月27日。9時15分ロッジを出発。スキー場施設内にあるエーボムレストランでSNOF Mスタッフと合流。なかでもジェフのアシスタントを務めるマイケルは、イタリア系のイケメンで、三菱ギャランの広告モデルに起用されたこともあるという。彼が今回の雪合戦現場の責任者である。コート設営にかかる。コートのライン引き、ポールとフラッグの準備。テニスコートには水がないので、隣接するスケート場から運ぶ。スコップが小さく華奢な作りのため悪戦苦闘、汗が流れる。テント等の用意がなく、屋外で雪球を作ることになるが、正午より気温が上昇し、雪球づくりには好条件となる。70～80人観客がコートを囲む。

ロッジのオーナー・ジョージとエリア、シェフのアイドリも見に来てくれた。ホットドッグとビールを片手に雪合戦観戦するようだ。至ってのんびりムードだ。雪球製造器が1台しかないため、雪球づくりに時間がかかっている。谷岡は雪球づくりに専念せざるを得なくなった。スーザンや母親も手伝ってくれる。雪球づくりから試合形式のレクチャーが始まった。試合は白熱し、エキサイティングに展開され、一方的な展開になることもなく接戦で盛り上がる。14～16歳の少年が50名ほどが雪合戦を体験した。身体の大きな少年達はシェルターをどのように使うか戸惑っている感じ。齋藤監督が実演してみせる。雪球を相手に当てて興奮してはしゃぐのは万国共通。当てることに夢中で、チームとしての連携、フラッグ奪取への意識は薄い。まだ、スポー

ツとしての雪合戦になじみが薄いせいか、無造作に雪球を壊したり、踏んでつぶすなど、ふざけたり、遊びがはいる。遊びとしての雪合戦は体験しているが、ルールによるスポーツ・雪合戦に少し戸惑っているように見える。

千田氏がレフリーを務め、齋藤監督がジェスチャーを交えながら、シェルターの使い方、相手チームの攻め方、前線への雪球補給の方法を熱血指導していた。私は雪球づくりに専念。雪球づくりに時間がかかって、流れは悪い。全力を雪球づくりに傾注したせいか、とても疲れたが、周りのみんなの熱い応援と支援がその疲れを癒やしてくれた。英語版の雪合戦ルールブックを予め送っていたが、ルールの細部がまだ浸透していない。チャンネル9、ヘラルドサン(新聞社)、雑誌、ラジオなど取材が多く、事前の告知の周到さを実感した。ペンションに戻り、サウナで汗を流す。

夕食後、地元の酒場「グリーンムス」で反省会を兼ねて運営上の注意点、今後の課題について意見交換をした。ジェフ、マイケルはじめ雪合戦を手伝ってくれたスタッフが一堂に会した。なぜかポリスマンのデビットとボブも参加。ジェフからは、学校で8月上旬に雪合戦をやりたいとの反響があったという話を聞いた。酒の勢いで話題は拡散し、将来日豪の対抗戦ができないか。冬のオリンピック競技の可能性はある。プレーヤーの数を9人から7人にできないか。今回のコート設営は適切であったか。雪合戦情報を定期的に送って欲しいと多岐にわたった。通訳の阿部氏によると、マウント・ビュラーの観光局が今回のイベント開催を高く評価し、大変喜んでいるという。デビットから業務用ビクトリア警察の冬用帽子をプレゼントされた。ペンションまでの帰路は、赤と青の回転灯を回したパトカーが送ってくれた。日本人感覚では理解できない、大陸的なオーストラリアのおおらかな気質を感じた。午前1時30分になっていた。

7月28日は荒天のため予定は中止。7月29日、前日の荒れた気候が嘘のように晴れ上がる。9時15分ペンションから徒歩でコートに向かう。途中上空から突然雪球が飛んできた。高い位置にある建物の横で、少年が「YUKI GASSEN!」と叫び手を振っている。一昨日参加した少年だろうか。雪合戦スタッフに親しみを持って接してくれる子ども達が多く、大きな喜びを感じる。JAPANから来たSNOWBATTLEのスタッフということで、現地ではいろいろな場面で好意的に対応して頂いた。SNO・FMの事前の情報提供が行き渡っていると感じた。

コートに到着後は、初日と同様、直ちに用具のチェックとラインを引き、特に雪球づくりに全力をあげる。12時30分に、270名の小学生が大挙来場。メルボルン市内からスキー学習で来場、現地に滞在しているそうで、プレーヤーを交替しながら、7試合を消化した。1試合で使用する雪球は540個。1台の雪球製造器で1回の作業でできる雪球は45個。20分ほどで試合は終了するから、その間に次の試合の雪球を用意しなければならない。子ども達は、雪球を投げ合うことがとても楽しそうである。千田、齋藤の両氏、マイケルをはじめとする現地スタッフの動きも精力的でスムーズになった。きょうは、アルペンレストランの従業員がボランティアで手伝いに来てくれた。

チャンネル9のインタビューを受けた。日本での人気度、競技人口、オーストラリアで雪合戦をする意味、将来の夢、雪合戦は遊びかスポーツかを問われた。日本では、全国的に大会が開催されており、雪合戦のチームが現在でも2,000チームあり、今後さらに増えるだろう。雪という共通の資源を持つ世界各国に普及したいと考えており、いまはスポーツとして成熟させていく過程にある。冬の団体スポーツとして、将来はオリンピックの舞台で雪球を投げ合うことが夢である。人類古来の遊びとしての雪合戦を現代的に再評価

し、スポーツとして開発したのがこのスポーツ・雪合戦であり、雪合戦はいまやスポーツであると答えた。

ペンションに戻り、サウナに入る。雪球製造に全力投球したためか、腰が痛くとても疲れた。でも満足感と達成感で一杯である。ホテル、レストラン「アルペン」のオーナー・ブーニーさんから、彼のサインの入ったワインをプレゼントされた。「雪合戦がオリンピックで実施されたときに飲んでくれ!」。そのワインはまだ我が家のサイドボードに奥深く置かれたままである。7月30日。帰国の日である。玄関でスーザン母娘に会った。「昨日も雪合戦をずっと観ていた。すばらしかった。おめでとう。成功よ!」。雪合戦の国際的普及に、前途遠遠の感を強くしていた私の心に、一陣の薫風が吹いた。嬉しかった。

❄ 初めての海外普及活動から学んだこと

海外での初めてのスポーツ・雪合戦の実施であったが、問題提起された部分も多い。列記しておきたい。

- (1)コート広さ。縦40メートルは良いが、横は15メートルは必要でないか。両チーム18名がプレーするには狭く感じた。(その後プレーヤーの人数は7名に変更され、コートを狭くするルール改正が行われた。)
- (2)海外では用具が絶対的に不足している。特に雪球製造器は最低4台ないと、運営がスムーズに行かない。情報だけでなく、用具提供と指導スタッフの派遣も必要である。
- (3)ヘルメットの留め金が弱く、外れることが多かった。(スポーツメーカーの参入、改良で改善された。)
- (4)雪球製造機のカップが1つ外れていた。溶接が弱かったのか、取り扱いのなかで破損したのか不明。また、製造器のカップの位置が微妙にずれて

いた。

- (5) 雪球製造器の下にのける角材、雪球ケース、スコップ(簡易、変形なものはあったが)が用意されていなかった。雪合戦大会開催のため必要な用具のリスト表があると良い。
- (6) 予め作ったシェルターの型枠に雪を入れてシェルターとしていた。シェルターの厚さについてルールブックに言及がない。シェルターを独自の工夫で製作した努力は高く評価したい。
- (7) 味方同士のパスが目立つ。当然アウトになる。ボックスの役割が理解されていない。ジェフとマイケルの努力により、競技内容はおおむね理解されているものの、細部とチームプレーの意識がまだない。試合を重ねることにより、理解されていくと思う。
- (8) 副審の旗の大きさとデザインに一工夫欲しい。(現在は使用されていないが、帰国後、ピンクと水色のモザイク調の旗を創った。)
- (9) 攻撃の際、相手コートには入れるプレーヤーの制限。フラッグの位置をもっと前に出す。(その後ルール改正され、このことはルール化された。)
- (10) 審判のジェスチャーは、国際化に合わせてもっと分かりやすくする。判定の言葉は何語を使用するのか。「3番アウト」では国際試合では選手に伝わらない。日本語を判定の言葉にするならば、そのことをルールに明記し、外国の審判員にも指導しなければならない。
- (11) ゼッケンをワンタッチ式にする。(改善された)
- (12) トス(じゃんけん)は、コインの使用を検討すべき。
- (13) 雪合戦の国際的な呼称の統一が必要。(現在は「雪合戦」「YUKIGASSE N」に統一された。)
- (14) ルールを細部まで整備する。審判規定、運営・進行も掲載する。

ひとつひとつが大きな課題であり、今回初めて外国で雪合戦ゲームをしてみて痛感したことばかりである。実行委員会としては、その内容を検討、研究し、地道に改善しながら雪合戦を成熟した冬のスポーツに近づけていきたいと思っている。

ヨーロッパで初の雪合戦

1994年4月ヨーロッパ初の雪合戦が、フィンランドラップランド州ケミヤルヴィ市で開催されることになった。ケミヤルヴィ市と壮瞥町は、民間企業が推進していた「サンタ村構想」の過程で、1994年5月22日友好都市調印をした関係にあり、両市町には様々な交流があった。その一例として、壮瞥町は5億円の国際交流基金を創設、町内の中学2年生(当初は中学3年生)全員を全額公費で、海外研修として、ケ市に派遣。ホームステイを含む国際交流事業を23年間実施している。ケ市からも2年に1度青少年が壮瞥町を訪れている。小さな町だからできる全員参加の交流事業である。

このなかで、ケ市は、当町が実施している「雪合戦」に注目、その運営やルール、用具について学習するため、スタッフを昭和新山に派遣し、大会にも参加して準備を進めた。昭和新山国際雪合戦実行委員会は、ケ市で開催される雪合戦大会を支援するため、毛利順一副実行委員長など5名のスタッフを派遣した。派遣されたのは、毛利の他、矢野守(イベント・施設)、阿野祐司、阿野光弘(競技・審判)、事務局次長・谷岡康德(運営)である。

4月とはいえ、北極圏にあるケ市の気温は1日中マイナス。風が冷たい。雪合戦会場は、市内の中心地の広場に1コート設営されていた。大会開催のため、実行委員会が結成されており、市をあげてこの冬のニュースポーツに取り組んでいる熱心さを感じた。開会式では、地元の小学生が「ゆきやこんこ

ん」を合唱し、私達日本のスタッフを感激させた。雪球は、ラップランドテントのなかに灯油ストーブをいれ、雪を暖めて作っていた。大会当日は、午前10時で気温マイナス3度、小雪が舞う天候であったが、会場には多くの市民が訪れ、コートのを二重三重の観客が埋めた。雪や寒さの中で生活してきたフィンランドの逞しい国民性を感じた。コート横には大きなデジタル時計が設置され、試合時間の経過がわかりやすい。出場選手は一人一人紹介され、誇らしげにポーズしている。大会運営もスムーズで、特に研修を受け、教育された「中学生審判員」の毅然としたレフリーぶりに、同行した指導審判員の両阿野氏も絶賛していた。

出場した選手のなかには、長身、大柄な方も多かったので、雪合戦のルールやコートの設営について、体験した感想を聞いてみた。「日本人の発想でシェルターやシャッター、コートをつくっているが、身体の大きな欧米の選手に不利と感じないか」。答えは明快であった。「スポーツはルールによって運営され、選手はルールに基づいてプレーする。我々はルールを研究し、勝利を目指して最善の作戦を考える。日本の選手はシェルターを上手に使うが、我々は使わない。動いた者を撃つ。」。緻密なゲームプランにより徐々に相手チームを追い詰めていく日本式攻撃に対して、ヨーロッパスタイルは、より攻撃的で、パワフルだ。農耕民族と狩猟民族の文化の違いだろうか。その戦法にも大きな違いがある。昭和山山国際雪合戦に出場したカナダチームのガイドを、過去3回務めたが、カナダチームも、俊敏な動きのできない大きな身体をシェルターに隠すのは難しいとして、豪腕を活かした後方からの攻めが目立った。

フィンランドの大会に日本からはるばる参加したチームがある。岩手県の西部レイダース(西和賀町)で、過去2回優勝している。フィンランドではその

強さと、巧みな試合運びが賞賛されている。

第1回のフィンランドの大会では、チームのなかに7名のプレーヤーうち2名は女性を入れることが条件となっていた。日本のスタッフも参加を要請され、地元のアンナとジョアンナという中学生の女性2名の協力を得て、急遽チームを編成した。大会運営や審判技術には慣れていても、プレーの経験がほとんどない我がチームの成績は惨憺たるものであった。本場の日本のチームに勝ったと相手チームのボルテージは上がる一方でやんやの喝采である。

ルールの運用、会場設営、大会運営すべてが良好であり、スポーツ・雪合戦が北欧の風景にマッチしていた。ヨーロッパに確固たるスポーツ・雪合戦の橋頭堡が築かれた。

国際雪合戦連合結成

昭和新山国際雪合戦には、チームとして本国から参加した選手のほか、留學生、国際ビジネス協会(International Business Association)、国際協力機構(JICA・Japan International Cooperation Agency)の研修生、大使館・領事館の職員、あるいは日本各地から参加したチームの一員として個人参加した外国の人達も多勢いる。

この30年間に参加した外国人選手の国は、南北アメリカでは、アメリカ、カナダ、メキシコ、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、ベネズエラ、ウルグアイ、パラグアイ、ボリビア、チリ、コロンビアの12カ国。

オセアニアでは、ニュージーランド、オーストラリア、パプアニューギニア、バヌアツの4カ国。

ヨーロッパでは、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、イギ

リス(イングランド、スコットランド)、オランダ、ベルギー、ドイツ、アイルランド、ハンガリー、ロシアの11カ国。

アジアでは、イラン、ヨルダン、インド、パキスタン、スリランカ、バングラデシュ、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー、マレーシア、インドネシア、フィリピン、ネパール、モンゴル、中国、韓国、台湾の19カ国。

アフリカでは、エジプト、マラウィ、モザンビーク、ギニア、ニジェール、セネガル、ザンビア、タンザニア、ウガンダ、ガーナ、ケニア、モロッコ、ボツワナ、レソト、ペナン、トーゴ、コートジボアール、ガボン、ブルキナファソ、エリトリア、ジンバブエの21カ国。昭和新山でプレーした外国の選手は、67カ国で延べ400人を超えた。

北欧の国からの要望もあり、2013年2月22日、北海道壮瞥町洞爺サンパレスで、国際雪合戦連合設立のための会議が開催された。参加したのは、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、ロシア、オランダ、オーストラリア、カナダ、アメリカ、そして日本の9カ国である。幹事国はヨーロッパがフィンランド、アメリカ地区はカナダ、アジア・オセアニア地区は日本となった。会長には日本の松本勉が選出された。その後、ベルギー、タイ、中国が加盟し、現在は12カ国となっている。

第29回大会に出場した中国チームの監督・武浩文氏によると、中国国内では2016年に8都市で雪合戦が実施された。その模様はインターネットで中継され、400万人の中国国民が視聴したという。この雪合戦では「人工降雪機」を使用して雪球を作った。2017年は開催場所を増やし、雪合戦の普及を図りたいと意欲的である。「人工降雪機」を使用した雪合戦は、オランダ、ベルギー、タイでも行われている。また、夏の雪合戦用に開発された「模擬雪球」を使用した「ビーチ雪合戦」や「屋内雪合戦」も実施されるようになり、シーズン

オフの夏に雪合戦の練習をするチームも見られるようになってきた。

外国人初の1級審判員の誕生

昭和新山国際雪合戦では、大会中審判員の資格審査を行う。第29回大会では、2名の外国人が受審した。ノルウェーのゲイル・デゲストロムさん(64歳)と、フィンランドのアリ・ポイリオさん(58歳)である。スポーツ・雪合戦の審判員は、1～3級まであり、最も権威のある1級審判員は、2級取得後、5年以上審判員としての技術、知識の研鑽が求められる。ルールの理解度、判定の正確さとともに、主審としてゲーム全体をコントロールできる力量が身についているかが問われる。学科、小論文と実技で判定される。今回は、外国からの2人を含めて10人が挑戦し、合格者は9名。ゲイルさんとアリさんも合格し、初の外国人1級審判員の誕生となった。今後、ふたりにはそれぞれの国で、後進の審判員の指導、養成の責務を負うことになる。外国での審判員の養成は、スポーツ・雪合戦の更なる発展普及に寄与すると期待される。第30回大会では、カナダチームの3人が3級審判員に合格し、新たなステップを歩み始めた。

N航空運行企画室に勤務していたKさんは、千葉県在住であるが、永年雪合戦の審判員として活動してきた。勤務が休みの時は、群馬県や東北の各地で開催される大会で審判員としての技量を磨き、見事1級審判員に合格した。K氏は自らの履歴書に、「雪合戦1級審判員資格」と記入したという。人事担当者はその表記をどのように解釈したであろうか。働き方改革のなかで、ワーク・アンド・ライフのバランスが問われている。価値観が多様化している現代において、K氏のような体験が評価される社会になって欲しいと願っている。

❄️ 同じ発想をした町・新潟県小出町

1989年2月に雪合戦で地域おこしをしようとイベントを企画していた町が他にもあった。新潟県南魚沼郡小出町(現・南魚沼市)である。写真週刊誌では、「どちらが元祖・雪合戦!? 北海道壮瞥町 V S 新潟県小出町」と取り上げられた。NHKBS放送でも、両町の取り組みを紹介しながら、雪合戦の対戦を企画し、壮瞥町の強豪「オロフレ百姓一気ズ」が小出町に遠征した。同じ雪合戦をテーマとしつつも、両町のイベント創造には大きな違いがある。壮瞥町は、ルールや用具を開発し、競技性を重視したのに対して、小出町は、昔からある雪合戦の遊びの要素を残し、競技者の恣意的な判断も許容し、小出の歴史や文化を、ゲームのなかに盛り込んだ、郷土色豊かな方式である。雪球は、壮瞥町では試合前に事前に準備するのに対して、小出方式はコート内の雪を丸めて使用する。両町はお互いの違いを認め合いながら、雪合戦をテーマとして地域おこしを目指してきた共通項で同調し、長い間お互いにエールを送り続けた。

❄️ なぜ雪合戦は共感を得られたのか

人類最古の遊びともいわれる雪合戦を、スポーツとして再開発したこの試みが、なぜ多くの人の共感を得られたのか。筆者なりに考えてみた。

- (1) 雪さえあれば、いつでも、どこでも、誰でもができるスポーツであることと、ルールが簡単明瞭なこと。(簡易性)

- (2)雪国の人々が昔から慣れ親しんできた遊びであり、誰もが雪を丸めて投げた経験を持つこと。(郷愁心)
- (3)雪を丸めて投げるという人間の本能的行動をスポーツ化したこと。(本能回帰)
- (4)厄介物の雪を逆手に取って、地域の活性化のイベントの資源としたこと。
冬の生活のイベント化、スポーツ化。(意外性)
- (5)冬季に少ない団体競技であること。(団体志向)
- (6)白煙を上げる昭和新山をバックにしたロケーションの良さ。環境をいじることなく、大自然のなかで、天からの贈り物の雪を活用する点においてエコロジーブームにあっていること。(自然との共生)
- (7)日常の憂さを忘れ、雪球を思いっきり投げる気持ちよさと、相手プレイヤーに当てたときの快感。(リフレッシュ効果)
- (8)カラフルなコスチュームやユニフォーム。工夫を凝らしたフラッグ。白い雪原に色彩が交錯すること。(ファッション性)
- (9)ヘッドワーク、チームワーク、フットワークを要する、スポーツとしての深みとおもしろさ。(競技性)などと分析している。

❄ イベントからビジネスへの模索

このスポーツ・雪合戦の開発の過程で、様々な意見が交わされた。その目的は、冬期観光の核となるイベントを創造し、地域活性化の起爆剤としようとするものである。イベントを通じて、冬期の地域の魅力を発信し、交流人口の増加に結びつけようとしたものである。その対象は、国内ばかりでなく、海外も視野に入れること。したがって、イベント名には、「国際」の冠を入れた。

地域おこしは、地域経済に一定のインパクトと効果がなければ、持続的な

活動に励みが出ない。2004年10月、町内の観光業者、ホテル、スキー場が構成員となり、「スポーツ・雪合戦体験センター」が開設され、1～2月に受け入れをしている。これまで、大阪府、兵庫県の関西圏、静岡県の高校の「雪合戦修学旅行」の受け入れや、台湾・韓国・フィリピン・タイなど海外からの観光客を対象とした雪合戦体験が実施されている。雪に初めて触れる人ばかりで、雪球を相手に当てると大きな歓声があがった。参加者は、旅行前から雪合戦を楽しみにしていたと目を輝かせていた。スポーツ・雪合戦体験センターの阿野裕司代表（現・昭和新山国際雪合戦実行委員長）は、「体験を通じて、スポーツ・雪合戦の認知度を上げたい。観光客の誘致に繋がれば・・・。」と語った（2017年3月8日、北海道新聞）。イベントからビジネスへの模索が始まっている。

雪合戦と人材育成

スポーツ・雪合戦の普及に伴い、スタッフが世界あるいは国内各地に派遣される機会が多くなった。オーストラリア、フィンランド、ノルウェー、カナダ、タイ。国内でも、九州・四国・中国・北陸・東海・関東・東北地方にスタッフは足を運んだ。オーストラリアとフィンランドへの普及活動についてはすでに記述したが、ノルウェーのヴァルドーには、堀口一夫、松本勉、松永美継、岩倉光良、堀口英男、カナダのロッキー山脈麓のジャスパーには、庵 匡、小林一也、堀口正章、阿野光弘、タイには堂下洋紀が派遣された。スタッフはスポーツ・雪合戦発祥の地・開発した地域の代表として、そのルール、運営、用具の使用方法に熟知していることが不可欠である。物見遊山で出かけるのではない。多くの人と出会い、交流し、スポーツ・雪合戦の伝道師として、あらゆる疑問にアドバイスできる知識と力量が求められからだ。

雪合戦の実行委員会事務局を3年間担当したら、雪合戦をテーマに90分の講演ができるようであれば、本気で雪合戦に取り組んだとはいえないというのが谷岡の持論である。それほどスポーツ・雪合戦は、ドラマチックでエキサイティングなスポーツであり、話題に事欠かない。

他の地域に普及活動にいくこと、マスコミに対応することは、ある意味他流試合に出るのと同じで、自分の力量を試されることでもある。試行錯誤や失敗があるかもしれない。それにめげず、反省と学習で、スタッフとしてスキルアップして欲しいと願っている。その体験、試練が必ず地域の人材として育っていく糧になると考えるからである。これまでも多くの先輩スタッフがこの洗礼を受けながら、地域づくり、地域おこしを実践してきた。若い世代の皆さんには、チャレンジ精神をもって、このスポーツ・雪合戦に関わってもらいたいと期待している。

1998年2月(第10回大会)から、実行委委員会は雪球チャリティーを開始した。雪球1球を1円と換算し、被災地に贈ろうという活動である。第1回目として、阪神淡路大震災で被災した子ども達に贈った。雪合戦は多くの人の善意とボランティアで支えられている。その返礼の意味を込めたささやかな社会貢献の行動である。2000年3月31日には、有珠山が噴火し、逆に多くの方から、「昭和新山国際雪合戦がんばれ!」と義援金を頂いた。災害はいつ誰に襲いかかるか分からない。雪球チャリティーはいまも続いている。

オリンピックへの大きな夢

2018年12月5日、アメリカから興味深いニュースが飛び込んできた。コロラド州セブレンス町で、100年程前に「人に向かって物を投げつけてはいけない」趣旨の条例が制定されていた。このなかには雪合戦の禁止も含まれて

いた。「僕達が楽しみにしている雪合戦を禁止するのは時代遅れだ。日本では雪合戦をスポーツとして、オリンピックを目指す動きがあるのに!」と、異議を唱えたデーン君という9歳の子どもがいた。デーン君は両親とともに、「雪合戦禁止の撤廃」を求めて署名活動をしたという。デーン君は議会でも陳述し、議会は全会一致で「雪合戦禁止」を撤廃したというものであった。雪合戦が、時間空間を超え、世界の子ども達に親しまれていることを示す出来事であった。

第29回昭和新山国際雪合戦を実施した2017年には、冬季アジア大会が札幌と帯広会場を会場として開催された。この大会には32のアジアの国から、2,000人の選手・役員が参加した。昭和新山国際雪合戦には、139チーム選手役員1,400名の参加である。数字的にはアジア大会には及ばないが、雪合戦単体の競技としては大きな規模の大会になっている。

札幌市の秋元克広市長は2026年の冬季オリンピックの招致を推進することを明言している。ただ、2018年の韓国平昌(ピョンチャン)で冬季、2020年東京で夏季、2022年中国北京(ペキン)の冬季と、アジアでのオリンピック開催が続くことから、その実現はかなりハードルが高いとの見方もある。2018年5月、秋元市長は2026年のオリンピック招致を、2030年に軌道修正すると発言された。

スポーツ・雪合戦には、カーリングやスケートのパシュートのように、団体競技としてのおもしろさ、魅力が一杯ある。「模擬雪球」の開発により、雪のない国も「雪合戦競技」に参加できる。冬季オリンピック参加国の地域的拡大に大きな貢献することが可能ではないだろうか。

2018年2月24～25日に開催された第30回大会では、フィンランド、カナダ、中国、日本の4カ国が参加して、初めて国別対抗の本格的な国際試合が

実施された。日本は、全国の雪合戦の強豪チームから15名の雪合戦の精鋭を選抜し、「YUKIGASSEN JAPAN」を結成した。日本チームは卓越した技量とチームワークで圧勝し、優勝した。他の3チームも善戦した。特に、カナダ対中国戦はVT戦にもつれ込む接戦となった。スポーツ・雪合戦は、その聖地で国際化に向けて大きな一歩を刻んだ。

私達壮瞥町民には、大きな夢がある。自分たちが知恵を出し、汗を流して創り上げたスポーツ・雪合戦が、平和の祭典・オリンピックの舞台で、世界の仲間が、友情の雪球を投げ合う日を夢見ている。そのためにも、「2030年の札幌冬季オリンピック」が実現し、まずは公開競技として、雪合戦発祥の地・昭和新山で、より多くの世界の皆さんに、冬のニュースポーツ、雪合戦を紹介したいと願っている。



❖ 科学者と医師のアドバイス

雪合戦を雪国のスポーツ文化として、学校教育のなかに取り入れてもらおうという考えは当初から持っていた。冬にできる数少ない団体競技であること、雪という資源があつてできるスポーツであること。その稀少性と競技の楽しさを児童生徒に体験してもらい、ニュースポーツとして根付かせたいという思いからである。毎年雪が降ると、壮瞥町内の小中高校のグラウンドには、雪合戦のコートが設置された。ただこれは教育一環として、体育の授業として採用されたからではなく、各大会に出場するための練習コートである。スポーツとして普及し、学校教育のなかで採用されるためには、安全性の確保が必須条件である。黎明期の大会では、雪球が顔面に当たり、ケガをするプレーヤーや審判員がいた。耐球性に優れたヘルメットの開発と、雪球のことをより詳しく知るため、科学的に分析する必要に迫られた。

そこで、1991年7月1日、事務局の谷岡と太田秀樹は、雪と氷を研究している、北海道大学低温科学研究所(所長・秋田谷栄二教授)を訪れ、実情を説明し、科学者のアドバイスを求めた。翌1992年2月22日、低温科学研究所では、南極越冬の経験を持つ雪と氷のスペシャリスト、成瀬廉二助教授(当時)を、調査のため昭和新山国際雪合戦大会に派遣してくれた。成瀬助教授は、大会で使用される雪球の作製からゲームで使用されるまでの雪球の経路を見ながら、作ったときの雪球温度、コートに持ち込まれたときの雪球温度、試合直前と

直後の雪球温度を測定した。当時は、雪球をつくと45個はいる木製の雪球ケースに入れていたが、外気に対しては無防備であった。「雪球作製法に関する所見」(成瀬レポート)と題したその報告書には、雪球の温度変化を示す調査データとともに、「雪は外気に触れ、温度が下がると硬化し、氷状になる特質がある。これを防ぐには、例えば、発泡スチロールのような気密性の高い入れ物に保管し、試合直前に取り出すことが雪球の硬化を防ぐ。」と提言されていた。実行委員会には思い当たる失敗例があった。2日間の大会日程であるので、前日に翌日分の雪球をつくり、農協の低温倉庫で保管してもらったのである。成瀬助教授の指摘のとおり、翌朝雪球は氷と化し、全球廃棄せざるを得なかった。成瀬レポートを受けて、実行委員会は雪球ケースにふたをかけることとし、試合前には審判員が雪球の硬さをチェックする対策を講じた。また、審判員にも、「緑のヘルメット」の着用を義務づけた。

国立札幌病院に明神一博医学博士がおられた。役場の仕事を通じて知りあった。あるとき雪合戦談義に花が咲いた。「谷岡さん、私を雪合戦の顧問ドクターにして下さいよ!」。明神先生には、大会中のケガの対応と、そのケガの原因は何であるのか、医師の立場からアドバイスを頂くこととした。幸い重大なケガは発生しなかったが、試合を観察した後、今後の注意点として、(1)用具(ヘルメット)の安全性を高めること、(2)プレーヤーのヘルメットの正しい着装の指導、(3)雪球の硬さのチェックの3点についてアドバイスを受けた。また、雪合戦の競技特性から、観客の安全対策についても配慮を求められた。

実行委員会は、スポーツメーカーと協議し、より安全性の高いヘルメット開発の推進、試合前に審判員が選手のヘルメット着装をチェックすること、観客の安全確保のため、防球ネットを設置することとした。このように、科学者や医師のアドバイスが、スポーツ・雪合戦の普及発展に寄与したことは間

違いない。

❖監督のサイン、観客のヤジ

雪合戦の勝敗を左右する要素のひとつが、監督の作戦指示の伝達である。試合の展開を見ながら、ゲームプランをコート上のプレーヤーにいかにもスムーズに伝えられるかが問われる。野球のようにブロックサインでは、プレーヤーが相手から目をそらす、いわゆる「目を切る」状態となり、格好の標的にされる。指示の内容を直接口にすると相手チームに漏れ、警戒される。

第1回、第2回大会を連覇した北電電気温水器軍団のとった作戦は、口答による指示である。それも相手に悟られないように、自社の作業の符牒を使った。相手チームには、理解不能な聞き慣れない言葉である。北電チームは、監督の一言で、誰を攻撃のターゲットにするのか、攻撃か待球か、サインによる統一した素早い動きを徹底した。常勝軍団と言われたチームの強みのひとつは、サイン伝達の工夫にあった。北電チームに触発されたのか、その後各チームがユニークなサインを考案する。「5・3・7・8」「2・6・8・1」。乱数表を暗唱しているかのような数字の羅列にも、監督の重要な作戦上の指令が含まれているそうである。「岡田さ～ん」。あるチームでは突然人名を叫ぶ。チームは雪球を投げるのを止め、ひたすら相手の雪球攻撃に耐える。「山本さ～ん」。今度は一斉に雪球を投げ始めた。このチームは、会社の同僚の名前をサインに使っていた。岡田さんは、管理部門で黙々と会社の経理・管理を担当している人なのだろうか。そうすると、山本さんは、営業で走り回っている社員となる。変な想像をしてしまう。これもひたすら勝利を目指す、ヘッドワーク、チームワークのなせる技であろうか。

観客の声援にもウィットに富んだものもある。「島松平和協力隊」という女

性自衛官で編成したチームがあった。レディースの部が新設された第3回から出場し、以後連続3回決勝進出、優勝2回の強豪である。体力があり、走力・投力にも優れている。ゲームでは圧倒的な攻撃力を活かして攻め込み、相手チームのフラッグを奪取するなどプレーの精度が高い。判官鼯鼠(はんがんびいき)のギャラリーが思わず叫んだ。「自衛隊攻めるな!自衛隊は専守防衛じゃないか!」。その後、隊員の人事異動や、チーム名のとおりPKO活動に派遣される隊員もいて、メンバーが揃わず、優勝から遠ざかっている。強豪チームの復活と、国際貢献に励んできたその勇姿を、雪合戦コートに見せてもらいたいと願っている。

❄️ スポーツ・雪合戦、作戦あれこれ

ニューススポーツ故に、毎回各チームは新戦法を考えてくる。自陣の後方から、相手陣の最深处で油断して緩慢な動きをしているBKプレーヤーを狙った「長距離砲」を、スカッドミサイルと言った。湾岸戦争が勃発し、その時使用されたミサイルから連想したようだ。世相の反映とはいえ、ドキドキする怖いネーミングである。ユーモア溢れる作戦もある。センターシェルターにこもる相手プレーヤーに対して投げる放物線の球を、「ロブ」あるいは「ロブボール」と呼ぶ。このロブを集中して短時間に投げ続けることを、「雨あられ作戦」という。これを避ける方法として、雪の壁にぴったり貼り付く「やもり作戦」がある。実によく雪の壁に貼りつけるものだ后感心する。

ただ、近年は、ロブボールの精度が上がり、壁のやもりも当てられるようになってきた。そこ登場したのが、「背面ダッキング」である。正座をしたような姿勢で、上体を仰向けにして目は上空を見る。落ちてくる雪球を確認しながら、身体を前後左右に軽やかに動かす。丁度、ボクシングで相手のパンチを

避ける動きに似ている。そのスリリングなプレーは、観客からやんやの喝采を受け、ゲームの見所のひとつになっている。

当初の大会では、48メートルのコートの長さを考慮し、相手の補給距離が伸び過ぎ、前線の雪球が尽きたとき逆襲する戦法があった。ゲームの前半はシャッターにこもり、じっと相手の攻撃に耐えている姿から「穴熊作戦」といわれた。この作戦も、バックラインの新設(FWはバックラインの前でプレーしなければならない)と、サイドラインが36メートルに短縮されたことから、現在は消滅した戦法である。

審判の開始の笛とともに、全員が相手のフラッグ奪取を目指して殺到する「一斉攻撃」。その華々しさを観客には受けるが、審判は大混乱する作戦である。そもそも球技は、ひとつの球を複数の審判員が判定するものである。5人の審判員で、14個の雪球の行方を見て判定することは物理的に無理である。そこで同時に相手コートに入れるプレーヤーは、3人以内とルール改正された。サッカーのオフサイドのようなルールで、これに違反するとチームは敗退となる厳しい制裁がある。

両チームの取得セット、ポイントが同数の時は、シャッターに標的を置き、標的を落とした数で勝敗を決める。ビクトリースロー(VT戦)を行う。サッカーのPK戦に相当する。この時標的として使うのが、発泡スチロールでできた雪だるまである。北海道早来郵便局が、「雪だるま小包み便」として考案したもので、雪だるまをかたどった発泡スチロールに雪を詰め、全国に配送されているヒット商品である。早来郵便局真保局長の協力により使用させて頂いている。ありがとうございます。

❄️ スポーツ雪合戦の実況中継

第3回大会では、NHK衛星放送がスポーツ・雪合戦のゲームを初めて実況中継した。実況アナウンサーはNHK室蘭放送局の南山吉弘さん(現・NHK青森放送局)、解説は高屋敷日出夫さん(北海道雪合戦連盟副会長・元新日鉄室蘭野球部監督)。事前の打ち合わせで、話題性のあるチームを取り上げることになった。そのひとつが、海外から初めて参加した「香港ドラゴンズ」であった。雪に縁のない香港のチームがどのような試合をするのか、興味津々であった。しかし、選手は、白い大福餅のような雪球を持った瞬間から感激モードになってしまった。チームに作戦があったかどうかは知らないが、みんなが雪球を投げることに熱中し、チームプレーや雪球補給を忘れてしまった。コート上に棒立ちになったプレーヤーは、相手チームの格好の標的になり、次々とアウトになった。開始20秒、全員アウトで第1セットは終了した。第2セット、若干抵抗したがこれも30秒足らずで全員アウト。早々と試合が終了してしまった。

当時は1セット5分であったので、予定を9分ほど余してしまった。慌てたのは放送スタッフ。ディレクターがアナウンサーに「つなげ!つなげ!」と大声で指示を送る。南山アナウンサーは慌てることなく、高屋敷さんに、スポーツ・雪合戦ルールの解説を求めた。高屋敷さんは、雪合戦のコートとシェルター・シャッターの表示してある解説板を使い、高校野球解説でおなじみの軽妙な話術で、分かりやすくルールを解説した。南山さんは戸惑ったと思う。一般的な球技は、1個の球に対して選手がプレーし、その結果を審判が判定する。アナウンサーはその事実を視聴者に正確に伝える。野球・サッカー・ラグビー・バレーボール・テニスなど・・・。

しかし、スポーツ・雪合戦では最大14個の雪球が飛び交い、5人の審判員

(当時)がそれぞれのエリアで判定する。アナウンサーには、全体を見ながら、局面のプレーの判定を伝えるという、極めて高度な観察眼が求められることになる。2時間枠のLIVEの番組は、5試合を実況中継、選手や雪合戦関係者のインタビューを入れて放送された。その後、雪合戦のテレビ放送は、録画編集することが主流となり、実況放送は実施されていない。それだけに、空前絶後、あえてスポーツ・雪合戦の実況放送に世界で初めてチャレンジした、南山さんと高屋敷さんの名前は、スポーツ・雪合戦放送の歴史に燦然と刻まれた。

❄️ 雪合戦を支える人・ひと

昭和新山の所有者で、世界で唯一の活火山保有者・三松三朗さん。昭和新山の生成や火山防災を研究する民間学者である。開会式の受付、センターコート横の大スコアボードの表示、聖火の採火と大忙しである。ある冬、長崎県島原市から、火山防災シンポジウムの講師として要請があった。その日程調整の際、三松さんは2月の最終週は雪合戦があるから駄目と回答した。島原市側は当惑したらしい。火山防災への造詣が深く、各地の講演会、シンポジウムで提言を続けている三松さんは、要請があれば、それまでは他の日程を調整しても、最優先に応じていた。島原市の担当者は、あの三松さんが、火山防災シンポジウムの日程調整で優先した雪合戦とは何者だろうと訝しがったという。2009年8月22日、洞爺湖・有珠山地区、新潟県糸魚川地区、長崎県島原半島の3地区は、日本国内では初の世界ジオパークに認定された。この認定に向けて、三松さんは中心メンバーとして尽力された。いま、三松さんは、雪合戦のセレモニーは次男靖志さんに譲り、ジオパーク友の会会長として、雪合戦会場内で、ジオパークの魅力を来場者に伝える活動をして

いる。

ボランティアグループあかね会は、会員に高齢女性が多い団体である。「私達は、体力的に寒い昭和新山には行けないが、暖かい公民館調理室の作業には参加できる。」と、雪合戦鍋の材料となる野菜の切り込みに励んでくれる。そして大会当日は、女性団体グループが知恵を出し合って考案した「雪合戦鍋」が提供される。30年間この活動を継続してくれている。

大会期間の2日間、ビニールハウスの中で、良質の雪をつくるため、黙々とスコップを動かすスタッフ、メインコートを含む9コート63基のシェルター・シャッターを製作する人達。延べ400人の町民ボランティアの熱意と、前向きな姿勢がこのイベントを支えている原動力である。昭和新山国際雪合戦30年の歴史のなかで、多くの町民が、その与えられた持ち場で、雪合戦というテーマを意識して、知恵を出し、汗を流した。

議会議員も例外ではない。大会運営、涉外、審判、雪球係、サブイベント担当、総務員として記録や賞状・賞品の手配などに配置され、ボランティアスタッフの一員として大会を支えている。人口2,500人余りの小さな町が、老若男女、すべての職種の町民で運営し、全国、海外からの雪合戦の仲間と交流しているイベント、それが昭和新山国際雪合戦なのである。



✧ 新たな観光資源と情報発信のための拠点づくり

スポーツ・雪合戦は、全国各地、そして世界11カ国で開催されるようになってきた。世界67カ国の人達が、このニュースポーツを体験している。壮瞥町は、その開発者、発祥の地として、情報を集約し、発信する責務をと使命も帯びている。現在の態勢は、町役場の産業建設課が事務局を所掌し、窓口となっている。ただ、スポーツ・雪合戦の普及・拡大、その最終目標の大きさと、国際的な拡がりを考えると、課の業務のワン・オブ・ゼムでは、物事の迅速、丁寧な対応に支障があるのではないかと懸念する。もはや、スポーツ・雪合戦はローカルイベントではなく、よりグローバルな視点と展開が求められている。もちろん、担当者は全力を挙げ、一所懸命であることは認める。オリンピックの競技種目に育てようという壮大な目標があるとしたら、この実現のためには、新たな組織体制の構築が待望される。

筆者は過年、箱根芦ノ湖を訪れたことがある。そこには「駅伝ミュージアム」が新設されていた。新春の箱根路を若者が駆ける、東京～箱根間関東学生駅伝競走をPRし、その歴史を紹介する施設である。参加大学のユニフォームやゼッケン、これまでの歴史年表が展示され、激走の名場面がテレビで放映されている。駅伝ファンが多数訪れており、記念グッズも販売されている。スポーツ・雪合戦も30年の歴史を経て、冬のニュースポーツとして定着してきている。用具やルールには他の競技にはない特異性もあり、普及度も日本国内は

かりでなく、海外でも実施されるようになった。アイデアにヒントをくれた東南アジアや東アジアの観光客のなかには、雪合戦を体験したいというニーズもある。これら状況を踏まえ、スポーツ・雪合戦の発祥の地、聖地として、昭和新山地区に「雪合戦ミュージアム」の建設を提案したい。そこでは、これまで開発してきた、ルールブック、ヘルメット、雪球製造器等の展示や、ルールの解説、雪合戦の激闘シーンのビデオ放映があってもよい。また、人工降雪機を活用した雪合戦体験ゾーンの設置や雪合戦グッズの販売も考えられる。新しい観光資源としての雪合戦を、四季を通じて昭和新山に定着させることである。この企画で最も大切なことは、ここを拠点として、雪合戦情報の収集・集約し、全国・世界に向けて発信を行うことである。

その担い手は、NPO法人・雪合戦インターナショナルが適当ではないか。冬期観光の活性化と国際的イベントの創造を、長期的展望に立って実施するとした初心を思い起こすとき、現在はそのステージを迎えているのではないかと思う。

海外普及へのパワーアップ

スポーツ・雪合戦は、日本各地はもとより世界11カ国で開催されており、国際雪合戦連合も結成されている。冬季オリンピック競技への期待もある。しかし、各国での本競技の定着化が進んでいるかと言えば、否定的にならざるを得ない。その原因は何点か指摘できる。用具が絶対的に不足している。例えば、オーストラリアでは雪球製造器が1台しかなかった。雪球製造がスムーズな運営を左右するだけに、用具のスムーズな供給が喫緊の課題となる。また、各国ではまだ運営スタッフ、審判員が十分に養成されていない。ただ、フィンランドやノルウェーには普及のキーパーソンとなる1級審判員が

誕生し、その活躍が期待できるし、フィンランドのように中学生を対象とした審判員の養成が功を奏している例もある。今後、海外の雪合戦スタッフをどのように養成していくかも大きな課題である。各国の実施主体となっている雪合戦連盟の受け皿も様々である。企業が受け皿となっている国は、その継続性に不安が残る。フィンランド、ノルウェー、ロシアのように、市町村が支援する開催に移行することが望ましい。国際雪合戦連合加盟各国相互の情報交換と支援が急務である。

雪合戦の国際化を推進するためには、本部のある日本の役割、責務も重大である。必要に応じて、普及活動を行うスタッフを配置し、現地に赴く機動性と用具を速やかに供給できる体制づくりも必要になる。オリンピックのことは夢のまた夢とならないように、新たな海外普及戦略を建てるべきである。そのための財源の確保、人材の育成のため、国際化を進めるためのセクション(国際雪合戦連合本部)のさらなるパワーアップが求められている。

サポーター人口の参画

第3点目は、運営・審判員を含めたスタッフの確保である。全国的に、人口減少が地域振興のパワーを奪い、イベントの担い手不足を生じさせている。壮瞥町も例外ではない。第1回大会時の1989年3月に3,768人であった町の人口は、第30回大会の2018年3月末には2,568人にまで減少してしまった。このことは大会運営のスタッフ確保にも影響を与えている。現在は近隣市町のJ Cや企業の応援を仰いでいる。また、予選リーグは「相互審判制」を導入し、スタッフを補完している。

筆者が、ヘルメット開発要請のため、神戸のアシックス本社を訪問した際、「だんじり休暇」なる言葉を聞いた。大阪府岸和田市で毎年9月に開催される

「岸和田だんじりまつり」の運営に参画するため、岸和田出身の若者が1週間の休暇を取っているという。地方の人口減少が激しい昨今、出身者が、ふるさとの地域おこしに想いを馳せて、イベントを支援することは、現代的な故郷回帰として注目すべきことではないか。

もうひとつの支援者は、町外に居住する町のサポーターである。現代風に言うと「関係人口」と言うことになるのだろう。人口には、定住人口、交流人口といわれるが、第3の人口としての「サポーター人口」を増やすことが地方創生の新たなポイントになると考える。その応援したい市町村に、ふるさと納税、特産品の直買、地域づくり・振興のアイデア提言、イベントへの参画・支援など参加の方法はいろいろ考えられる。「雪合戦休暇」を取り、故郷のイベントを支援する若者、町外から応援してくれるサポーターが増加することに期待する。

そのためには、このイベントが、国際雪合戦として、より一層格調高く、權威ある魅力的なものにしなければならない。いま30年のスポーツ・雪合戦の歩みを俯瞰するとき、これからの30年に向けた戦略と、実行委員会と壮瞥町の「スポーツ・雪合戦」に懸ける意気込み、熱意、本気度が問われていると感じている。



地域活性化には3人の人間が推進役になるという。北海道新聞・高須賀渉論説員によると、よそ者＝外部からの客観的な視点でものをみられる人、若者＝しがらみなく挑戦できる行動力がある人、ばか者＝既成概念にとらわれない発想力を持つ人であると解説されていた。筆者は高校卒業後、地元の壮瞥町役場に4年間勤務した。期するところあり、退職して札幌の大学に進学した。社会福祉を専攻し、卒業後は病院のケースワーカーに内定していた。大学4年の2月、1本の電話がアパートにかかってきた。当時の壮瞥町長・館崎盛男さん（私が退職したときは、壮瞥町議会議長）である。「就職どうなった？」「壮瞥に帰ってこい！」。

“大志を抱いて郷関を出ず。もし、学なくならんば、死すとも帰らず”の悲壮な決意を持って故郷を飛び出した私にとって意外な展開になっていた。高須賀流に言うと、一時故郷を捨てた私は「よそ者」であり、大学を出たばかりの「若者」、自らの夢を追うのをやめ、一度退職した職場に戻りする「ばか者」でもあった。ただ、同じ人間でありながら、4年前の迷いながら仕事をしていた自分と、町と地域を元気にするんだという明確な目的意識をもった自分との大きな違いを感じていた。職場では、与えられたポジションで、一人ひとりの町民の幸せを願い、大学で学んだ知見を生かし情熱をもって仕事に臨んだ。地域では、次代を担う少年少女を対象に、剣道修錬を通じた人間教育に全力を投入した。そして再就職から10年目、スポーツ・雪合戦と出会った。悪戦苦闘の毎日で

あったが、新しくひとつのものを創り上げる大きな喜びと充実感があった。多くの壮瞥町民の精力的な活動、知恵を出し、汗を流す姿を目の前で見てきた。

第4代実行委員長の阿野裕司さんが、30年の歴史を振り返りながら、地元新聞社のインタビューに応じた。「雪合戦は町民の宝」、「雪合戦においては我々は世界の中心にいる。」、「雪合戦は誰か一人でも欠けるとこれまでできなかったし、これからも継続できない。」と語った言葉に共感するし、その重みも実感している。

北国の小さな町の一介の商工観光係長が、全国を走り回り、海外までニュースポーツの普及に出かける。マスコミにもたびたび出演することは普通はあり得ない。これは職場の上司である、菅原俊一町長、広瀬秀正助役、商工観光課長であった、船田寅雄、藤盛 勉、佐藤正敏の各氏の深い理解と支援、同僚の太田秀樹さんの協力があったからできたことである。また、昭和
新山国際雪合戦実行委員会の阿野康春初代実行委員長、山中 漠統括の適切な指導・指示の賜である。スポーツ・雪合戦の黎明期、実行委員会にアドバイスし、スポンサー企業や関係団体とのコーディネート役を担ってくれた、協同広告の菊池、朝日の両氏にも紙面でお礼申し上げたい。

結びに、このスポーツ・雪合戦を創り上げ、30年間継続してきた壮瞥町民の英知と努力に最大の賛辞を贈り、歴代の運営スタッフに感謝申し上げて、筆を置きたいと思う。

❄️谷岡康德(たにおかやすのり)

1951年(昭和26年)北海道壮瞥町生まれ、高校卒業後壮瞥町役場に就職、4年後進学のため退職、北星学園大学文学部で社会福祉を専攻、卒業後壮瞥町役場に再就職、福祉係長、広報・統計係長から1991年商工観光係長に異動し昭和新山国際雪合戦事務局次長を兼務する。スポーツ・雪合戦普及のため全国各地で指導や講演を行う。オーストラリア、フィンランドにスポーツ雪合戦普及のため派遣される。総務課長、助役(副町長)を経て2011年退職。

現在は、壮瞥町町社会福祉協議会副会長、橋口2自治会会長、壮瞥竹友会(剣道)主任指導者として活動、雪合戦ではカナダ・中国チームのガイドを務める。剣道教士7段、日本パークゴルフ協会公認指導員

雪球が世界に飛んだ日

－小さな町の大きな挑戦・北海道壮瞥町－

2019年(平成31年)2月1日 発行

筆者 谷岡 康德 (たにおかやすのり)

〒052-0101

北海道有珠郡壮瞥町字滝之町287-136

TEL・FAX (0142)66-2120

制作 有限会社 村上印刷

〒052-0026

北海道伊達市錦町95-1

TEL (0142)23-2625 FAX (0142)25-2459